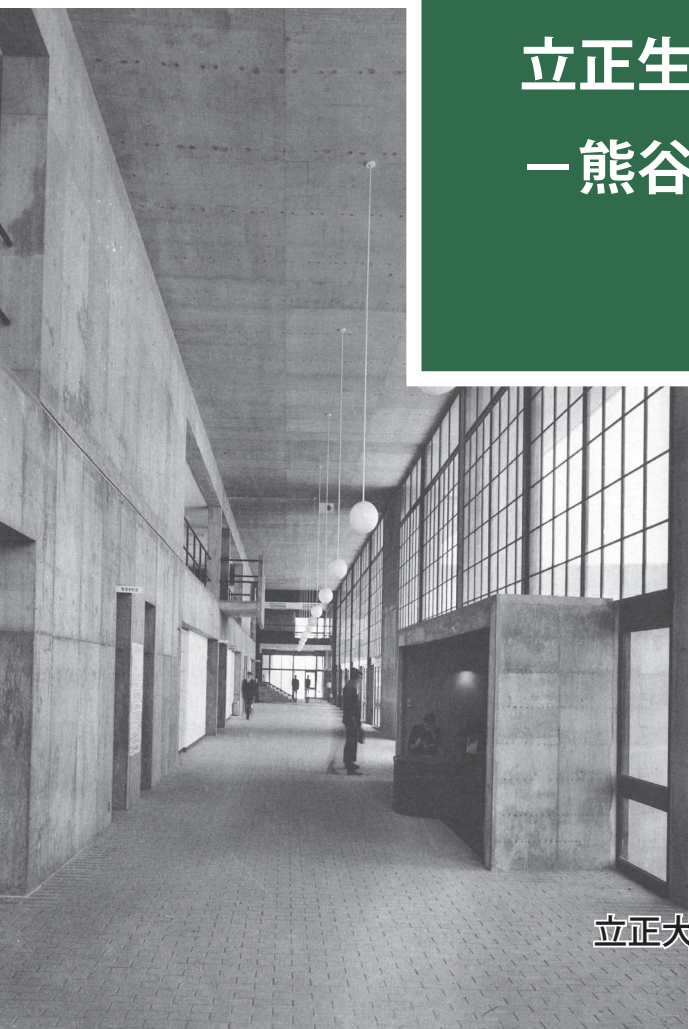




熊谷キャンパス 50 周年記念
立正大学博物館第 12 回特別展

立正生の学び舎 —熊谷キャンパスの半世紀—



立正大学博物館

ごあいさつ

熊谷キャンパス開設 50 周年を迎え、さまざまなお祝い事が催される中で、立正大学博物館では記念の展覧会を開催する運びとなった。

熊谷キャンパス 50 年の歩みを資料によって振り返り、さまざまな苦労や努力の跡を辿ることで、あわよくば 50 年後の立正大学のあり方を考える機会となればと願いつつ、関連資料を展示することとした。

昭和 30 年代頃までは「人生 50 年」といわれ、実際にそのくらいの年齢で一生を終える人も少なくなかったのであるから、50 年が大きな節目であることは疑いない。

その間に、元号も昭和から平成に変わり、あと数年でまた新しい時代に入るという。熊谷キャンパスの風景も、昭和時代と平成時代では大きく変わり、これからも変わりつつあるだろう。

本展が、熊谷キャンパスの歴史を知る手がかりとなり、昔を知らない若者が歴史に関心をもつ機会となれば、それに越したことはない。

今回、昔の熊谷キャンパスを知る方々にご寄稿いただいたが、展示された資料以上にリアリティが感じられるのは不思議である。ご寄稿いただいたことに深甚の謝意を表したい。

平成 29 年 11 月吉日

立正大学博物館館長 時枝 務

目次

ごあいさつ／目次／凡例

はじめに	1
1. 熊谷キャンパスの誕生	3
2. 熊谷キャンパス周辺の遺跡	13
3. 教育と研究	15
4. 学生生活	23
5. 特論	27

年表

凡例

- (1) 本図録は、第 12 回特別展「立正生の学び舎—熊谷キャンパスの半世紀—」の展示図録として作成しました。
- (2) 本図録の執筆は時枝務(当館館長)と吉水美紗登(当館専門職員)が分担し、編集は館長の指示のもと吉水が担当しました。
- (3) 本図録に引用・参考した文献は巻末に掲げました。
- (4) 本特別展開催にあたり、以下の方々・機関にご協力を賜りました。感謝申し上げます。
国立公文書館 熊谷市 立正大学大学史編纂課 片柳勉(地球環境科学部地理学科教授)
下岡順直(地球環境科学部環境システム学科助教)

【表紙の写真】

上段：本部棟
下段左：コリドール
下段右：アカデミックキューブ

【裏表紙の写真】

上段：熊谷キャンパス開設当初のキャンパス
下段：現在の熊谷キャンパス

はじめに

立正大学熊谷キャンパスの所在する熊谷市は関東平野のほぼ中央、東京都心から50～70km圏、埼玉県北部に位置し南北20km、東西14km、面積159.82㎡の都市である。北は利根川を境として群馬県、西は深谷市、南は東松山市、吉見町、滑川町、嵐山町、東は行田市、鴻巣市にそれぞれ接している。

平成17(2005)年10月1日に旧熊谷市、旧大里町、旧妻沼町が合併し、さらに平成19(2007)年2月13日に旧江南町と合併し現在の市域となった。

市域の大半は平坦な地形が広がるが、西部は櫛挽台地、南部は江南台地及び比企丘陵の一部で、畑や平地林に覆われている。また中央部には荒川や元荒川が流れ、南部には和田吉野川や和田川、北部には利根川や福川など多くの河川が流れ、豊かな自然環境を形成している。

交通では、市内にJR上越新幹線、JR北陸新幹線、JR高崎線、秩父鉄道の4路線が敷設され、現在6駅が開設されている。道路では、主要道路である国道17号、407号などが通っている。

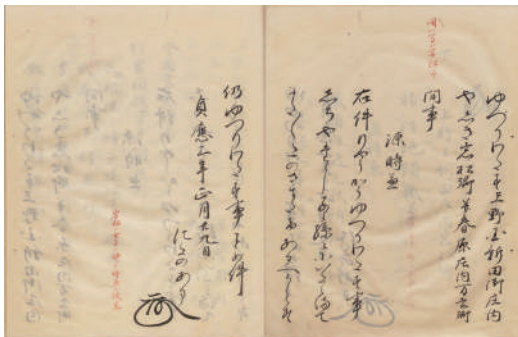
熊谷キャンパスはJR熊谷駅から南西に約4kmに位置し、標高約55mの江南台地に立地する。荒川の支流、吉野川と和田川に挟まれた湿性の土地で支流に開折された浅い谷が多数形成され、周辺には縄文時代から中世の遺跡が点在する。

キャンパスのある熊谷市万吉の地名の由来は諸説あるが、中世の頃には武蔵国大里郡の荘園「春原荘」(新原荘とも書く)に属し、「春原庄内万吉郷」と呼ばれていた。春原荘に関する初見の史料は貞応3(1224)年の新田尼の譲状で、新田尼が亡き夫の新田義兼から継承した上野国新田荘、岩松郷と春原荘内の万吉郷を孫の時兼に譲与した。時兼は譲与された岩松郷から岩松氏を名乗り、万吉郷内に館を構えたといわれている。その後、万吉郷は代々岩松氏に相伝された。

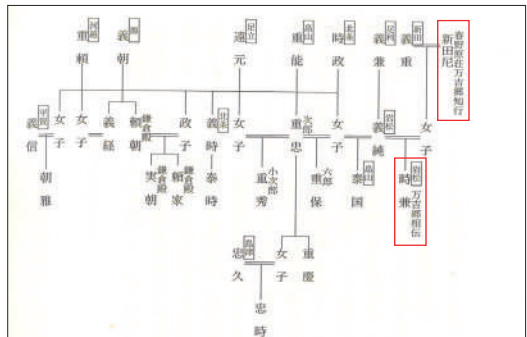
近世に入ると忍藩領となり「大里郡万吉村」となる。江戸幕府が19世紀前半に作成した地誌『新編武蔵風土記稿』によると、万吉村は荒川右岸の低地に位置する大里郡の七か村に属し「御正領」という地域単位を構成していた。この御正領は、江戸時代の武蔵国に特徴的な地域単位「領」の一つで、江戸時代前期においては代官の支配管轄や用水の管理単位などに機能していた。

明治22(1889)年、市制町村制施行に伴い大里郡内の町村は熊谷町をはじめ1町10村となる。大里郡万吉村は村岡村、平塚新田村と合併し吉岡村となった。

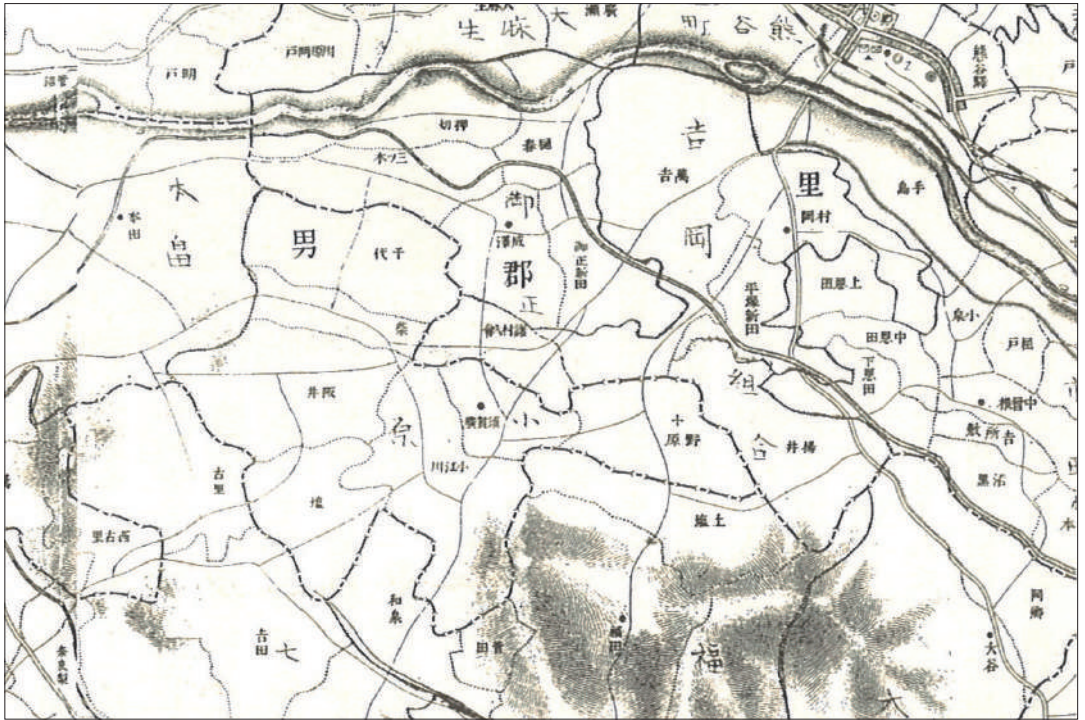
その後、昭和30(1955)年に熊谷市と合併し、現在に至る。



第1図 新田尼譲状写 (正木文書 国立公文書館)



第2図 族縁関係図 (江南町史通史編 上巻より)



第3図 明治期の行政区（明治22年4月）



第4図 現在の熊谷市概略図

1. 熊谷キャンパスの誕生

昭和39年(1964)2月11日に開催された第68回理事会は、大崎キャンパス(現品川キャンパス)が狭隘なため、新たに埼玉県熊谷市に第2キャンパスを設置することを決定した。新たなキャンパスの候補地としては、ほかにも埼玉県大宮市や東京都八王子市などいくつもの場所が挙げられたが、さまざまな条件を比較検討した結果、最終的に熊谷に決まったのである。熊谷キャンパスは、熊谷市大字万吉字鹿島の12万坪に及ぶ広大な土地であったが、埼玉銀行からの融資を得て買収することになった。まず、総合グラウンドを整備し、教養課程の校舎を建設するという計画が立てられた。

昭和40年9月、立正大学熊谷教養部創設事務局が熊谷キャンパス予定地に設置され、望月恭一主任ほか2名の職員が派遣された。望月主任らは、地元の不動産業者の協力を得ながら、土地の買収を開始した。翌年には職員数が5名に増員され、着々と土地の取得が進んでいった。5月8日には、熊谷キャンパス予定地の第1回目の見学会がおこなわれ、大崎から大型バス2台を連ねて、大勢の教職員が熊谷へと乗り込んだ。県学会は好評で、その後もう一度実施され、多くの教職員に熊谷キャンパス予定地の実態が周知されたのである。



第5図 買収した大学建築用地

当時の熊谷キャンパス予定地一帯は、大部分が雑木林で、一部が水田や畑地として利用されているのみであった。しかも、そこへ通じる県道は、曲がりくねっているうえに、未舗装の泥道だった。定期乗合バスは、1日3便あるのみで、熊谷キャンパス予定地へ辿り着くのは思いのほか難儀であった。

スポーツ施設の建設(第I期工事)

昭和40年1月、前田設計と美津濃スポーツを主体に、グラウンドなどの設計がおこなわれた。具体的には、野球場1面・陸上競技場1面・ラグビー場1面・サッカー場1面・テニスコート10面・バスケットコート3面・バレーボールコート5面を、公認競技場として造成するというものであった。さらに、合宿所と各クラブの部室が計画され、グラウンド整備などの第I期工事が着手された。

これらのスポーツ施設のうち、陸上競技場は、当時の熊谷市では公式競技ができる唯一の施設であった。また、野球場は、旧後楽園球場と同規模で、熊谷市では広い球場であった。さらに、テニスコートは、10面という面数が、熊谷市



第6図 建設中の陸上競技場

内では稀有なものであったため、高校の全国大会の会場となったこともある。完成後しばらくして、これらの施設を貸し出して競技の大会が開かれることがあり、熊谷キャンパスのスポーツ施設は社会的な貢献をしたのである。

しかし、工事は順調に進んだが、陸上競技場手前の土地の地権者が買収を拒んだため、完成までに長年かかった。地権者は150名に及び、代替地を求めるケースが多かったため、代替地の地権者を含めると250名と交渉する必要があったのである。第Ⅰ期工事は、工事そのものよりも、前提となる土地の買収交渉に多くの時間が費やされたのであった。交渉に当たった職員の実力は、並大抵のものではなく、熊谷キャンパスの誕生は苦勞をとともなうものであった。

現代建築と新校舎建設（第Ⅱ・Ⅲ期工事）

昭和41年6月、建築家槇文彦（昭和3年生まれ）を代表とする槇総合計画事務所の設計により、教室棟・体育館・学寮（新生学寮・白菊学寮）を建設し、有隣館を移設する第Ⅱ期工事、本部棟を建設する第Ⅲ期工事に着工した。槇は、得意とする都市理論を武器に、学生運動で揺れる時代の新しい大学像を提示する建築を熊谷キャンパスで実現しようとした。槇が理想としたキャンパスの建築は、目的をもった機能的に優れた空間だけではなく、無目的で学生が自由に集うことができるような空間をあわせもつものであった。

槇は、そうした理想的なキャンパス建築を作り出すために、熊谷キャンパスの建築にあたって3つの柱を示した。1つ目は、熊谷の豊かな自然環境を活かしながら、集合的な建築群をレイアウトすること。2つ目は、中心を定め、建築群をまとめたものとする。3つ目は、

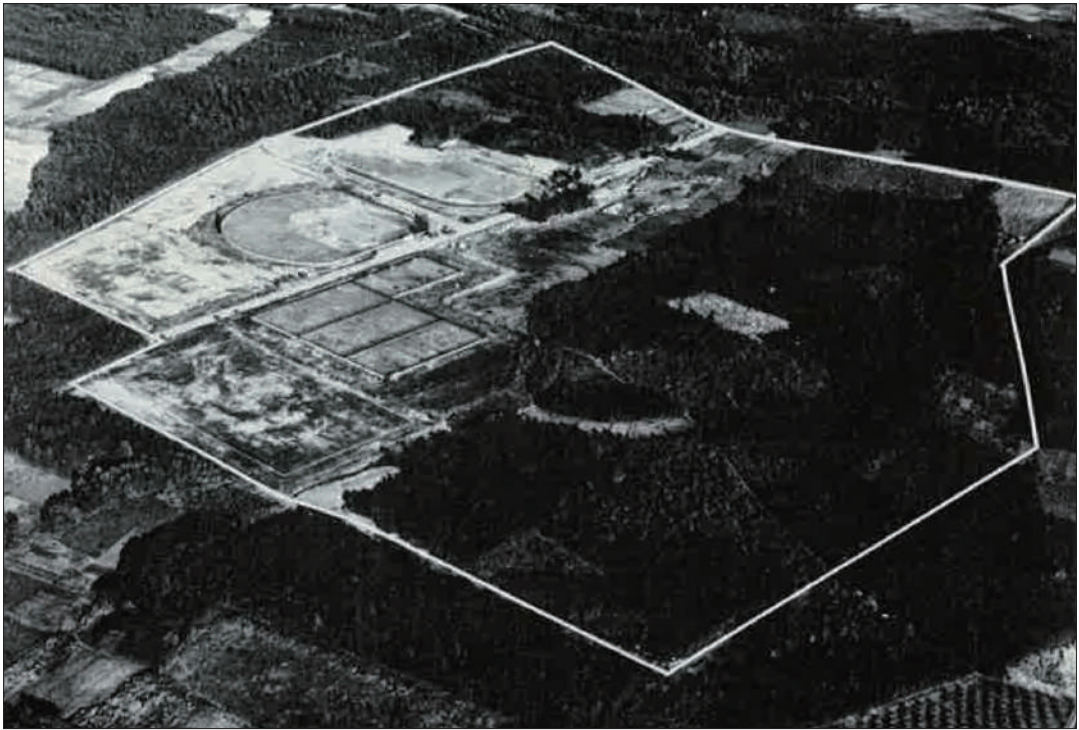
学生や教職員の生活に対応し、全体が小さな都市として機能すること。このコンセプトを、具体的な建築として設計し、都市としての性格を付与することが、槇の設計の課題となった。

1つ目の点に対しては、屋外広場・アーケード・屋内ホール・廊下・ブリッジ・塔などのアイテムを有機的に組合せ、視覚的・機能的に開放的な空間を創出した。2つ目の点に対しては、屋外広場に中心軸としての性格を付与し、そこから建物が伸びてゆくレイアウトを採用することで、建築群としてのまとまりをデザインした。3つ目の点に対しては、体育館・ショップ・寄宿舎・クラブの部室・教職員宿舎などが、全体として都市的な空間を演出することを目指した。こうした方法は、当時としては新しい試みであり、多くの建築家や建築評論家から高い評価を得た。その結果、槇は、熊谷キャンパスの設計で、毎日新聞社から、昭和43年度の第10回毎日芸術賞・建築賞を受賞した。

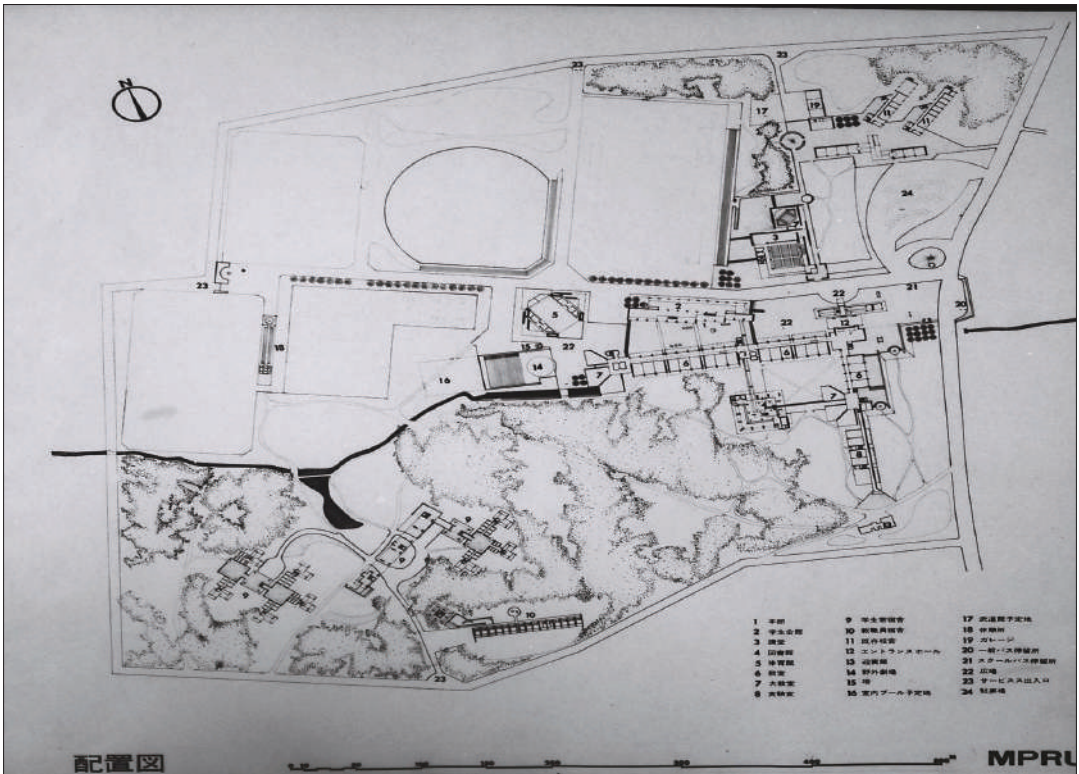
このように、槇が設計した熊谷キャンパスの建築は、時代の先端をいく現代建築であった。機能的で、社会性に富んだ教育施設であり、かつ美しい建築である点に槇のセンスが滲み出たものであった。



第7図 設計者による説明会



第8図 校舎建築以前のキャンパス



第9図 キャンパス設計図

後年、幕張メッセや京都国立近代美術館などの斬新な建築を生み出すことになる槇の初期の作品の1つが、熊谷キャンパスなのである。残念ながら、現在では、当時の建物は一部を残して解体され、写真でしか知ることができないが、その斬新さは写真からも十分に読み取ることができる。現在、熊谷キャンパスにわずかに残された往時の建築は、昭和40年代の建築として、きわめて貴重な遺構である。それは、現代建築史を伝える文化財としての価値をもち、今後も長く大切に護り伝えることが期待されるのである。

なお、教職員寄宿舎である有隣館は、熊谷市桜町1丁目にあった斎藤家を移築したもので、槇の設計にかかるものではない。斎藤家は、熊谷市箱田の名望家で、その住宅であった有隣館は、伝統的な日本家屋である。



第10図 有隣館

施設の充実

創設時の熊谷キャンパスは、建築としては立派であったが、不十分な面も多々残されていた。10年を経過した時点で既存の施設のメンテナンスに留まらず、施設整備が検討されて順次実現されることになった。

熊谷キャンパスの図書館は教室を利用して設

けられたため、狭くて使いづらいという問題があった。図書館を利用する学生や教職員のあいだから、図書館の環境改善を求める声もあったが、抜本的な改革には至らなかった。そこで、新たに図書館が単独の建築として設置されることになり、環境改善が図られることになった。建築工事は昭和53年7月に着工され、翌年9月に完成した。こうして長年の懸案であった立派な図書館が完成し、図書15万冊を収蔵する図書館として再出発することになった。

昭和55年3月には教養部実験棟、翌年3月には教養部研究棟が竣工し、教養部の施設が充実したものとなった。教養部は、昭和42年の開設以来熊谷キャンパスをベースキャンプとしながらも、品川と熊谷の両方で授業を展開してきたが、昭和56年から熊谷に一本化されることになった。ちょうど研究棟の竣工は、教養部の熊谷一本化と重なったが、これを画期として施設整備計画は一段落し、豊かな自然に囲まれた熊谷キャンパス独自の教育環境が整った。

その後、平成4年(1992)の開校120周年記念事業の一環として施設整備計画が立案され、熊谷キャンパスでは快適な学生生活のための福利厚生施設の建築が計画されることになった。具体的には、第1に当時閉鎖されていた男子学生寮である新生学寮を改修し、学生の宿泊



第11図 図書館

施設として再生させること、第2に学生食堂を主体とする福利厚生施設を建設することが課題となった。第1の点は、昭和59年10月にユニデンスの建設として実現し、学生寮の機能を引き継ぐ長期宿泊施設としての側面と、学生の課外活動などにとまなう合宿のための宿泊施設としての側面を兼ね備えた施設となった。第2の点は昭和60年3月に3階建ての福利厚生棟として実現し、1階が学生食堂、2階が商業施設・ミーティングルーム・喫茶室、3階が多目的ホールという複合的な施設が誕生した。福利厚生棟は後にステラと呼ばれるようになった。

平成3(1991)年2月には、教育研究センター棟(現2号館)が完成し、より充実した教育・研究環境が整えられ、最新のAV機器を備えた教室が設置された。平成6(1994)年9月には図書館保存書庫が増築され、各学部の図書資料室を含め30万冊以上の収納が可能となった。

平成6年4月には社会福祉学部の開設にともない新築された9号館、平成10(1998)年4月、地球環境科学部の開設にともなう実験室や研究設備を整えた3号館の完成した。

その後、大学開校130周年記念事業の一環として、第27代学長を務めた坂詰秀一名誉教授の尽力により、平成14(2002)年4月1日、立正大学博物館が開館した。博物館の建物は教

養部で使用していた実験棟を改修したもので、2つの展示室が設置されている。

博物館では本学が発掘調査した旧石器時代から近世にかけての貴重な資料や古鐘研究者、眞鍋孝志氏より寄贈されたアジア各国のさまざまな時代の鐘を中心とした撫石庵コレクション、本学同窓で著名な縄文時代研究者の吉田格氏寄贈の縄文時代遺跡の出土品などが展示されている。

また熊谷キャンパスは全域が遺跡として周知されており、これまでのキャンパスの開発にともなう発掘調査で出土した各時代の資料を展示している。



第13図 ユニデンス



第12図 福利厚生棟



第14図 立正大学博物館

熊谷キャンパス再開発事業

平成 19（2007）年 5 月、開設から 40 年経ち、施設の老朽化が進んでいた熊谷キャンパスは「熊谷キャンパス再開発事業」を立ち上げた。再開発にあたっては、多彩な生態系と自然豊かな風景を生かしたキャンパスづくりが最重要テーマとして行なわれた。

具体的には既存のキャンパスを再定義し新校舎建設や広場の整備をおこなう「アクティブゾーン」と、緑を保全する「キャンパスフォレスト」とを水路を境に分け、2 区画を対として『人』『自然』『建築』が融合したキャンパスづくりが行なわれた。

新校舎（アカデミックキューブ、スポーツキューブ、メディアフォレスト）は教室、事務室、厚生施設、情報メディアセンターを擁したアクティブゾーンを核にそれぞれの機能を集約した。新しく造成された水路脇には既存の樹木を利用した森のゾーンが設置された。また木製の散策路を設え癒しの空間を演出している。

また新校舎には環境に配慮した最新の技術や仕組みが数多く採用されている。空調システムは、エネルギー需要が少ない夜間に冷水、氷、お湯などで熱エネルギーを蓄えておき、日中に使用する水蓄熱という設備や、自然換気システムなど自然にやさしい設備を導入した。校舎外壁には直射光をやわらげるレンガスクリーンが用いられ外部からの熱負担の低減に寄与してい

る。屋根には太陽光発電システムが設置され、省エネや CO₂ の削減、学生・教職員への環境保全・省エネルギーへの意識向上に活用されている。

この熊谷キャンパス再開発事業は財団法人日本産業デザイン振興会主催「2011 年度グッドデザイン賞」をはじめ、「日本建築学会作品選奨」、「環境設備デザイン賞・環境デザイン部門最優秀賞」などを受賞し、また、建築専門誌やテレビなどでも取り上げられた。加えて、2300 本の既存樹木の調査・保全や新規植樹を行い、平成 29（2017）年 4 月に教育機関として初めて、「SEGES（社会・環境貢献緑地評価システム）認定」（財団法人都市緑化基金）を受けた。

ゲートプラザ

平成 22（2010）年 3 月に改修工事が終了したゲートプラザは、楨文彦の設計による面影を残しつつ耐震性の向上や最新の照明・空調設備などが導入された熊谷キャンパスの新たな「熊谷キャンパスの玄関」と位置づけられている。

エントランスには耐震補強の目隠し機能として壁面に設置されたウォールアートに、本学学園歌をグラフィックに表現している。



第 15 図 建設中のアカデミックキューブ



第 16 図 完成したアカデミックキューブ

スポーツ施設

平成 17 (2005) 年 3 月に陸上競技場・ラグビー場・サッカー場を人工芝に改修され、平成 19 (2007) 年 3 月には野球場も人工芝へと改修された。

熊谷キャンパス再開発事業として、平成 21 (2009) 年 3 月にサークルボックス(現 21 号館)に隣接してスポーツキューブが建設され、学生の安全面の確保とクラブ活動の充実がはかられた。

福利厚生施設

平成 6 (1994) 年 4 月、学生の福利厚生施設の充実をはかるためにサークルボックスが建設された。サークルボックスは地上 3 階建てで、冷暖房が完備され、部室として利用されている。武道練習場や男女別のシャワールーム、音楽スタジオも完備されている。

また、平成 8 (1996) 年 4 月には木造平屋造りの学生食堂 (パドマ) が建設された。外観は八角形の建物で周囲には自然の池が配置されている。

同年 3 月に完成した学生寮は、昭和 59 年に建てられた「ユニデンス」の名称を継承し、地上 14 階建てのツインタワーで、女子寮をユニ

デンス A 館 (316 室)、男子寮をユニデンス B 館 (438 室) とした。

室内には生活に必要な基本的な設備が整えられ、1 階にはフロントを設置し、学生生活のサポートを行なっている。また低層階には共有施設として食堂をはじめ、自習室、パソコンルーム、フィットネスルームなども設置され充実した生活が送れるよう配慮されている。

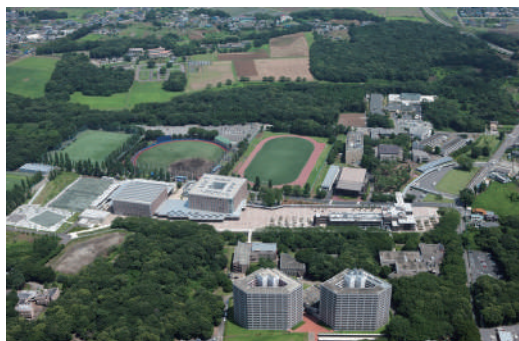
ユニデンス A 館の 1・3・4 階には短期宿泊所が設けられ、クラブや団体などの合宿や研修に利用されているほか、学生およびその家族など幅広く利用できる。



第 18 図 ユニデンス



第 17 図 ゲートプラザエントランス



第 19 図 熊谷キャンパス全景



No.	建物	No.	建物
1	1号館 ゲートプラザ	19	20号館 スポーツキューブ(体育館)
2	2号館 教室棟、教職教育センター	20	21号館 サークルボックス
3	3号館 教室棟(実験・研究棟)	21	22号館 倉庫・更衣室・クリーンセンター
4	5号館 教室棟	22	24号館 パドマ(学生食堂)
5	6号館 教室棟	23	25号館 野球部・ラグビー部寄宿舍
6	7号館 教室棟	24	26号館 サッカー部寄宿舍
7	8号館 教室棟	25	27号館 有隣館
8	9号館 研究棟、多目的ホール	26	ユニデンスA・B専用駐車場
9	10号館 福利厚生棟 ステラ	27	陸上競技場
10	11号館 インフォメーションセンター	28	野球場
11	12号館 校内簡易郵便局	29	雨天練習場
12	13号館 図書館	30	サッカー場
13	14号館 ユニデンスA館	31	ラグビー場
14	15号館 ユニデンスB館	32	テニスコート、多目的コート
15	16号館 博物館	33	弓道場
16	17号館 教室棟 ボランティアセンター	34	ゴルフ練習場
17	18号館 エネルギーセンター	35	アーチェリー場
18	19号館 アカデミックキューブ		

第 20 図 現在の熊谷キャンパス

【コラム①】

恋ガラス

熊谷キャンパスはモニュメントの宝庫である。アカデミックチューブの前面左側にあるサイコロを積み上げたようなかたちの「恋ガラス」は、楨総合計画事務所が彫刻家流政之（大正12年生）に依頼して制作した石彫で、静と動をともに感じさせる現代的な造形作品である。流は、もと特攻隊員という変わり種で、世界を放浪した末に彫刻家になった。楨文彦は、この石彫を配することで、なにもない空間に現代的な感性を吹き込み、キャンパスを都市的な場としてまとめあげた。



第 22 図 恋ガラス



第 21 図 空の刀

空の刀

図書館前の T 字モニュメントは、埼玉県出身の彫刻家関根伸夫（昭和 17 年生）の「空の刀」で、昭和 54 年に制作された作品である。関根は、「もの派」の巨頭で、世界を対象化するのではなく、対象を非対象の状態のまま知覚の地平へ解放し、その対象が含まれている世界を現出させることが芸術だと主張する。いわれてみれば、そんな気もする不思議な造形で、立正大学父兄会が寄進したものである。

立正大学短期大学部改組記念モニュメント

バス停を降りてすぐの庭にある時計台は、短期大学部改組記念に建てられたもので、今はない短期大学部を偲ぶ「よすが」となっている。モニュメント台座の碑文には「かつて立正大学短期大学部ここにあり 今日礎を築く 今やその使命を全うせり 本日これを閉じる その使命いまなお脈々としてこの地に伝う」とある。



第 23 図 短期大学部改組記念モニュメント

【コラム②】

鐘楼堂

サッカー部合宿所の近くにある鐘楼堂は、平成7年秋に、東京都新宿区常圓寺から移築されたものである。

常圓寺は、及川眞学立正大学学園第18代理事長（明治40年生）の自坊で、熊谷キャンパス開校に心血を注いだ功績にちなみ、故人が寄贈を希望されていたところから移築が実現したと伝える。平成7年春に解体に着手し、秋に完成したが、重量のある梵鐘を移動するためあって大変な工事であった。

及川眞学は、昭和5年に立正大学を卒業し、すぐに文学部講師となり、一時退職後、昭和36年から立正大学学園常務理事、次いで理事長に就任し、学園の復興に尽力した人物である。鐘楼堂の脇には、平成8年四月二十日付けの、立正大学学園第30代理事長田賀龍彦による、由来を刻んだ石碑が立っている。



第24図 及川眞学理事長（第18代）



第25図 鐘楼堂

日蓮宗宗立熊谷学寮本堂

昭和56年度、熊谷キャンパスにて仏教学部生の教養課程受講が決まった。それまで仏教学部宗学科では日蓮上人の教学を通して日蓮宗の僧侶を育成する役割を担ってきた。

学生は東京都台東区谷中所在の日蓮宗宗立学寮に希望者が入寮し、大学においては教学または学寮で僧風教育を受けてきた。

しかし熊谷にはそのような施設がなかったため、新たに建設することになった。

昭和56年3月、僧侶の教育のための施設、日蓮宗宗立熊谷学寮が竣工した。建設にあたっては事前に文学部史学科考古学教室による発掘調査が行なわれた。新入寮生を迎え、寮監・副寮監を置いて運営体制が整えられた。

熊谷学寮本堂では、御会式などに際して法事を執行しており、寮生の事相の習得に役立っている。



第26図 日蓮宗宗立熊谷学寮

2. 熊谷キャンパス周辺の遺跡

ここでは、熊谷キャンパス設置を前提とした開発にともなう熊谷校地遺跡の調査と、熊谷キャンパスの設置に関連しておこなわれた野原古墳群の発掘調査について、ごく簡単に触れておきたい。

(1) 熊谷校地遺跡

熊谷キャンパスは、ほぼ全面にわたって、旧石器時代から近代までの遺跡が広がっていることが知られている。文学部史学科に考古学専攻コースを有する立正大学としては、熊谷キャンパスの整備に際して、文化財保護法に則り、それらの遺跡を保護すべく努め、止むを得ない場合には発掘調査による記録保存を図ることが求められた。しかし、急速に進んだ熊谷キャンパス整備の初期の段階では、必ずしも十分な対応ができなかった。

昭和52年、図書館建設と調整池の工事開始に先立って埋蔵文化財の存否の確認が必要となり、夏休みに文学部助教授坂詰秀一が考古学的予備調査を実施し、発掘調査の必要性が確認されることになった。ところが、坂詰は多忙をきわめ、正式な発掘調査をおこなう余裕はなかった。そこで新たに1名の担当者を採用することになり、野村幸希専任講師が赴任し、昭和53年4月3日施行の「熊谷校地遺跡調査委員会規約」に則り、熊谷校地遺跡調査室を主体に発掘調査がおこなわれることになった。

発掘調査は、昭和53年の調整池（A地点）と図書館用地（B地点）に始まり、昭和54年には実験棟（C地点）・研究棟（D地点）・日蓮宗熊谷学寮（E地点）、昭和56年には浄化槽埋設地点（F・G・H地点）・水道管理設地（I地点）、昭和58年から昭和60年にかけては野

球場北隣駐車場（J地点）・室内バッティング練習場（K地点）・短期大学部南側自転車置場（L地点）・食堂棟（M地点）・水道管理設地点（N地点）・食堂棟東隣道路（O地点）・倉庫棟（P地点）、昭和63年には短期大学部新教室棟（Q地点）・大学新研究棟（R・S地点）で実施された。その後も、断続的に発掘調査が実施され、熊谷校地遺跡の実態の解明が目指されて現在に至っている。

発掘調査によってあきらかになったことは多いが、なかでもR地点における縄文時代早期後半の集落跡の検出は、それを構成する第1号竪穴住居跡の11.5 m×9.0 mという破格の大きさとともに、考古学界の注目を集めた。また、B地点における7世紀の集落跡、A地点における近世土坑墓群なども、地域史研究のうえで重要な情報をもたらした。そのほか、縄文草創期の住居跡の検出をはじめ、古墳時代の丘陵部の集落跡の解明など多くの新知見が得られたが、その大部分は熊谷キャンパスの整備という偶発的な出来事によって得られた情報であった。その意味では、一連の発掘調査は学校の開発行為にともなうもので、その成果は行政発掘の成果と一脈通じる性格をもつものであった。

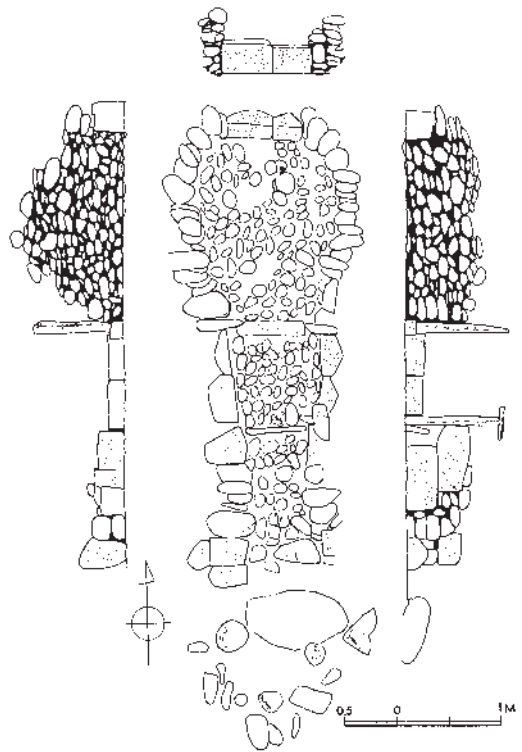


第27図 R地点第1号竪穴住居跡

(2) 野原古墳群

熊谷キャンパスに近い江南村（現熊谷市）にある野原古墳群は、国指定重要文化財「踊る人々」を出土した遺跡として広く知られていたが、その実態は必ずしもあきらかではなかった。前方後円墳1基は、早く昭和37年に柳田敏司らによって発掘調査されていたが、それ以外の21基を超える円墳についてはまったく調査の手が及んでいなかった。そこで、昭和39年3月、立正大学考古学研究室は、8基の円墳を抽出して発掘調査を実施した。それは、奇しくも、熊谷キャンパス設置が決定した1ヶ月後のことであった。

発掘調査の結果、主体部である川原石積みの横穴式石室が検出され、古墳時代後期の群集墳の実態があきらかになった。古いものは埴輪をともなうが、新しいものは埴輪がなく、埴輪造立が衰退する時期に営まれた古墳群であることが知られた。最古のものは前方後円墳で、その後、連綿と横穴式石室をともなう円墳が造営され続けたことが判明したのである。個々の横穴式石室には、複数の遺体が葬られており、家族墓的なものであった可能性が高い。それが21基以上集まって、群集墳を形成していたのであるが、前方後円墳の被葬者となんらかの社会的な関係がある集団の墓地と理解してよからう。



第29図 野原古墳18号石室実測図

野原古墳群の発掘調査の成果は、翌年5月に開かれた日本考古学協会第31回総会において、坂詰秀一によって発表された。その成果は、古墳時代東国の群集墳の実態を示すものとして、多くの考古学者の注目を集めるとともに、熊谷周辺において立正大学が考古学的な調査をおこなっていることを広く知らせる結果をもたらした。
(時枝 務)



第28図 野原古墳群



第30図 野原古墳11号墳出土鉄鏃

3. 教育と研究

(1) 短期大学部

立正大学短期大学部は「2年間で高い教養と大学としての専門教育を授け、優れた職能人を養成する」ことを目的に、昭和25（1950）年4月、大崎キャンパスにⅡ部（夜間）の宗教科・商経科・社会科の3学科が開設された。授業は学部との共用校舎で行なわれ、教授会も発足していなかったためカリキュラムの編成も学部が行なっていた。開設時の『学生要覧』によると3学科の開設科目76科目中63科目を学部が開設していた。カリキュラムの編成や担当教員の選任、運営は仏教学部、文学部、経済学部が担っていた。

熊谷キャンパスへの移転

昭和41（1966）年4月、短期大学部の商経科を熊谷キャンパスに移転するにあたり、仏教学部や文学部の専任教員の一部を配置換えし、短期大学部の専任教員とした。さらに商経科の移転の際には教授会が発足され、坂本日深立正大学学長（第17代学長）が短期大学部学長を兼任した。昭和45年4月には短期大学を大崎から熊谷へ移転する申請が認可され、昭和48（1973）年3月をもって立正大学短期大学部大崎キャンパスにおける23年の幕を下ろした。



第31図 短期大学部時間割の掲示

熊谷に移転した短期大学部は、商経科Ⅱ部と社会科Ⅱ部の2科で昭和41年4月には第1回熊谷短期大学部商経科入学式が行なわれ、熊谷市長をはじめ商工会議所会頭ら多くの来賓を迎え盛大に執り行われた。この頃、短期大学部に通う学生の年齢は様々で、自営業や公務員など大半は勤労学生であった。

保育専門学校

熊谷キャンパスに短期大学部が移転するのと同前後して、昭和44（1969）年、保育専門学校が熊谷に設置された。保育専門学校はⅠ部・Ⅱ部から構成され、保母資格や幼稚園教諭2級免許の資格が取得できた。開設当初の施設は短期大学部との共用であったが、教養部棟の完成に伴い短期大学部が移転したためA・B館を専用棟として使用した。その後設備が充実され、ピアノ練習教室や調理実習室などを完備した保育専門学校となった。

昭和51（1976）年、学校教育法の一部改正に伴い専修学校となった。第2次ベビーブームなど社会情勢の流れとともに3404名の学生が卒業したが、短期大学部の改組とともに幕を閉じた。



第32図 保育専門学校の開校式と入学式

総合短期大学への発展

昭和 58 (1983) 年 1 月 17 日、社会福祉科 (I 部・II 部)、商経科 (I 部)、幼児教育科 (I 部・II 部) の設置認可を得た。これに伴い社会科 II 部および保育専門学校は学生募集を停止し、在学生の卒業をもって廃止することが決まった。こうして短期大学部はこれまでの II 部のみの 2 学科から、I 部、II 部、3 学科をもつ総合短期大学が発足した。

昭和 61 (1986) 年には 18 歳人口の急増に伴い立正大学でも臨時定員増を図り、期限付きで社会福祉科 I 部と商経科 I 部はそれぞれ 100 名を 200 名に変更され、総定員数 1200 名の関東有数の大規模短期大学に成長した。一方、幼児教育科 II 部は翌年募集停止となる。

また昭和 58 年からは次々と施設の拡充・整備が行なわれ、熊谷キャンパス移転時に建設された A・B 館に加え、視聴覚機器および学生ラウンジを備えた C 館が完成した。また昭和 59 年には大学の施設であった D・E 館がそれぞれ短期大学部の研究棟として改装され、平成元 (1989) 年には F 館が完成した。

短期大学の改組

平成 3 (1991) 年、大学設置基準の大綱化を受け、立正大学では各学部の学部改組案が作成され教養部と文学部の改組による新学部設置の構想が焦点となった。とくに教養部は大学設

置基準の改正によって新学部への改組を早急に迫られていた。しかし文部省は定員増を伴う学部・学科の増設を原則的に抑制する方針であったため、学部新設を企図する各学部は短期大学の学生定員の転用に着目した。平成 4 (1992) 年 11 月には理事長、四大学長、各学部長による大学改組委員会が設置された。

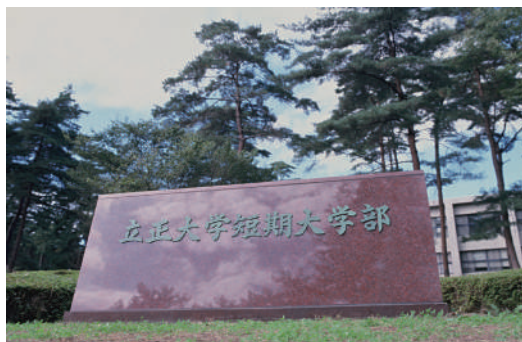
平成 5 (1993) 年 5 月、理事長より「全学的視点から短期大学部の 4 年制化を検討されたい」との要請があり、6 月には法人・大学・短期大学部からなる三者協議会が開かれ大学改組が検討された。その後平成 6 年 3 月 17 日、立正大学校務会、短期大学部教授会の議を経て社会福祉科・幼児教育科の定員のもとに社会福祉学部の設置申請の同意と、平成 8 (1996) 年度以降の 2 学科学生募集停止が決議された。

商経科については平成 8 (1996) 年度第 4 回定例教授会において、「短期大学部商経科および文学部地理学科の定員を基に地球環境科学部を新設する。また商経科は平成 10 年度をもって学生募集を停止し在学生の卒業を待って廃止する」との提案がなされた。

これにより短期大学部内の組織改組と転換に関するすべての手続きが終了し、幼児教育や社会福祉など多岐にわたり多くの人材を輩出した短期大学は、50 年の歴史の幕を下ろした。



第 33 図 E 館・短期大学部研究棟



第 34 図 短期大学部 銘板

(2) 教養部

昭和 40 (1965) 年 9 月、教養部創設事務所が熊谷に開設された。この事務所は大崎校舎から移築され、敷地内に流れる小川沿いに建てられていた。事務所には職員 10 数名ほどが勤務していた。同年 10 月 28 日、第 72 回理事会が教養部創設事務所にて行なわれ、昭和 42 年度より熊谷キャンパスに教養部を開設することが決定した。この理事会には元内閣総理大臣の石橋湛山学長 (第 16 代) も出席された。

教養部設置以前、教養課程の大部分は文学部に、一部分は仏教学部と経済学部へ属し教養課程の管理・運営は文学部が行なっていた。しかしその内容は十分なものではなく、教養課程をどのように充実させるかが当時の課題であった。

それら課題を充足させるため、昭和 42 (1967) 年 4 月、経営学部の誕生とともに全学の一般教育を一括して行なう「教養部」が熊谷キャンパスに設置された。

同年 4 月 12 日、第 1 回入学式が体育館にて執り行われた。式当日は近隣在住の人びとも見学を訪れ大変賑わった。入学式に先立ち、同月 10 日には第 1 回入寮式が行なわれた。熊谷キャンパス開設当初は大学生向けのアパートや下宿が不足していたため、大学設置の学寮や民間委託寮などが学生の生活を支えた。寮は男女に分かれており、男子寮は大学設置の「新生学寮」を含め 24 寮、女子寮は「白菊学寮」「松韻学寮」



第 35 図 創設事務局になった建物と看板



第 36 図 新生学寮 (男子寮)



第 37 図 白菊学寮 (女子寮)

の 2 寮であった。

教養部の授業は設置から 14 年間は大崎・熊谷の双方で行なわれた。原則として東京都・神奈川県の高専出身者は大崎キャンパス、埼玉県をはじめその他の道府県出身者は熊谷キャンパスと 2 キャンパス制がとられ、1 年次 3000 名を超える学生が学んだ。

開設当初は 2 キャンパス制や学生運動等の課題で混沌としていた教養部だが、10 周年を迎える頃には学生数も定員に近づき「教養ゼミ」「教養基礎演習」「総合科目」などを開設され、少人数教育とカリキュラムの多様化が図られた。また学生の国語力・文章能力の向上のために昭和 59 年度から人文系列に「国語表現」、情報化社会に対応するために社会系列に「情報処理」が開設され専任教員も採用された。

施設の拡充も行なわれ、昭和 54 (1979) 年に図書館、昭和 56 (1981) 年 4 月には法学部



第 38 図 昭和 42 年度 入学式の様子

の設置に伴い教養部研究棟が竣工し、それまで相部屋だった研究室はそのほとんどが個室となった。その後、昭和 60（1985）年に福利厚生棟（ステラ）、平成 2（1990）年に教育研究センターが建てられ、研究室・教室不足の解消が図られた。

平成 3 年、大学設置基準改正を受け、多くの大学で教養部改組とカリキュラムの改編が行なわれた。立正大学教養部においても教養部を改組し、教養部所属の教員を既存の 5 学部に分属された。

昭和 42 年から 28 年の歴史を築いた教養部は平成 7（1995）年 3 月 31 日をもってその歴史に幕を下ろした。

機関紙『紀要』と『LOTUS』

教養部の開設とともに機関誌『紀要』と『LOTUS』の発刊が企画された。

『立正大学教養部紀要』は教員の研究論文掲載雑誌として昭和 42 年から平成 6（1994）年までの間に 28 号まで刊行された。

『LOTUS』は、本学の建学の由来と論説の清純なイメージから榎崎宗重教授（文学部）の着想に基づき名づけられた雑誌である。久保田正文学監の『LOTUS』創刊号の巻頭言によると、「ロータスは蓮であるが、立正大師日蓮上人が、絶対の帰依をした経典の名称であり、日蓮なる

名称もこの経に由来している。法華経の中に、『世間の法に染まざること、蓮華の水に在る如し』という蓮華が、ロータスである」とある。『LOTUS』には教養部関係教員の論説や地理学科学学生による北埼玉地域を対象とした実地調査の成果が毎年報告されるなど、教員と学生の交流の場を提供した本学の刊行物のなかでも異色な存在であった。

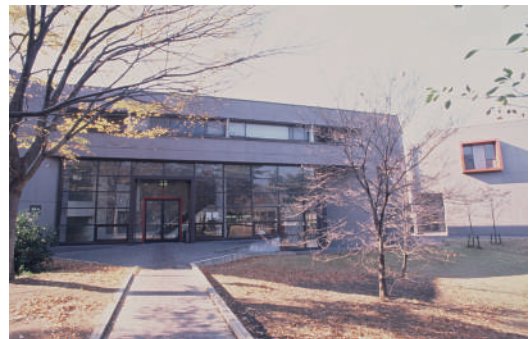
公開講座

教養部発足後、市民向けの文化的サービスの提供を目的に熊谷市内にて各専門分野の研究者による公開講座が行われた。公開講座は例年秋に行なわれ、熊谷市の文化的年中行事として定着した。

当初の講師は教養部の教員が務めたが、次第に他学部の教員や外部の講師も加わりさらに充実した内容となった。



第 39 図 『紀要』創刊号 『LOTUS』創刊号



第 40 図 教養部研究棟（現 17 号館）

法学部

(3) 学 部

立正大学は8学部15学科7研究科を有する総合大学である。現在、熊谷キャンパスは社会福祉学部、地球環境科学部の2学部によって構成されているが本展では、平成26年4月に熊谷キャンパスから品川キャンパスへ移転した法学部を含めた3学部について紹介する。

法学部

法学部は、昭和56(1981)年に熊谷キャンパスに開設した。その歴史は、昭和42(1967)年に法学の研究と教育を有機的に行い、法学部の設置の核とするために「法学研究室」が設置され、機関誌『立正法学』を発行したことに端を発する。

昭和53年8月30日、第163回理事会にて昭和56年の法学部開設が決定し、それに伴い法学部設置準備委員会が設置された。翌年7月30日、経済学部の経済法律、経営学部の経営法学を基礎とし、学生定員200名の法学部法学科の設置認可を申請し、昭和56年1月16日に認可された。初代法学部長には経済学部の大澤正男教授が就任した。

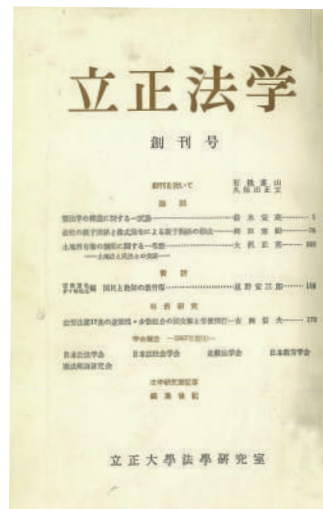
開設当初のカリキュラムは、経済法律、経営法学を基礎とした「企業法学」「経営法学」「産業法学」の観点から編成され、「予防法学」「実用法学」の視点にたった指導的職業人の育成を教育目標とした。教育方法は手作り教育の重視、隣接科目を意識した総合的カリキュラムなどが考案された。

また、地域に開かれた学部教育を目指し、社会人特別入学試験の実施や埼玉県、市町村、学部の共催による公開講座が実施され、大きな反響を呼んだ。資格取得等を目指す学生には公務員受験講座・法曹受験講座などの課外講座を開設した。平成7(1995)年には高度な専門的

職業人養成のための夜間主コース大学院が設置された。

研究面では、法学教室の機関誌『立正法学』の後継『立正法学論集』や『法制研究所年報』が創刊された。組織面では、大学組織改編による専任教員数の増加や教育研究棟の移転があげられる。

法学部は平成23(2011)年に創設30周年をむかえ、平成26(2014)年4月からは、品川キャンパスでの履修が開始された。これにより社会科学系3学部(法学部・経済学部・経営学部)を集中させ、学生のキャリア形成や共同研究による社会的還元への幅の広がりが期待されている。



第41図『立正法学』創刊号
昭和43年創刊。立正大学法学部の原点。

社会福祉学部

社会福祉学部の歴史は短期大学部社会福祉科にはじまる。平成7年12月22日、立正大学短期大学部（社会福祉科・商経科・幼児教育科）を改組し、翌年4月、熊谷キャンパスに開設した。初代学部長には星野貞一郎教授が就任した。

平成17（2005）年度に学部開設10周年を迎え、熊谷市において記念式典が挙行され、熊谷、高崎、長野、宇都宮、新潟の各市において記念公開講座が開催された。

平成28（2016）年には学部開設20周年を迎え、『世界からのメッセージ～平和と命の大切さ』（講師：渡部陽一氏）と題する記念講演会が行なわれ、また記念誌『社会福祉学部20周年記念 2006年からの10年のあゆみ2015』が刊行された。

社会福祉学部は学部開設時に短期大学部社会福祉科を改組し設置された「社会福祉学科」と、短期大学部幼児教育科を改組し設置され平成24年4月に学科名称を人間福祉学科から子ども教育福祉学科に変更された2学科で構成されている。

社会福祉研究所

社会福祉研究所は平成9年6月、学部専任教員を所員とし、福祉に関する研究や実践の進展に寄与することを目的に立正大学社会福祉研究所が開設された。初代所長には星野教授が就任された。

主な事業内容は、総合研究および調査、研究員の研究・調査等の活動助成、研究成果の発表および普及である。平成11年3月より『社会福祉研究所年報』を発行している。

社会福祉学研究科

平成12年4月、社会福祉学1専攻の修士課程が設置された。社会福祉学部を構成する2学

科を母体とし、高度の専門職員・研究者を養成するために開設された。

付置施設

平成13年には立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センターを開設し、地域社会におけるボランティア活動を学部教育の一環とした。センターの運営は学生スタッフが中心となって行なわれている。

平成23年4月には立正大学社会福祉学部子育て支援センター、通称「ベアリス」を開設し、熊谷市域の子育て支援拠点として地域の子育て支援機能の充実と学部教育が推進されている。

また、昭和47（1972）年4月には立正幼稚園、平成12（2000）年1月には特別養護老人ホーム・立正たちばなホームが開設され、実習など学部との緊密な連携がはかられている。



第42図 子育て支援センターベアリス

地球環境科学部

地球環境科学部の歴史は短期大学部 I 部商経科の改組と文学部地理学科の拡充にはじまる。

当時、理学的側面を有する地理学科が文学部内に設置されていることによる制約と研究・教育環境の不十分さ、教養部・短期大学部の廃止に伴う熊谷キャンパスの学生数の激減という諸問題がおこった。

このような問題への対応策として熊谷キャンパスにおける理科系の新学部の設置が検討され、平成 7 (1995) 年 4 月、経営学部・経済学部・法学部の 3 学部長の建議によって新学部設置準備委員会および、新学部設置申請委員会が発足した。

平成 10 (1998) 年 4 月 1 日、立正大学 7 番目の学部として熊谷キャンパスに開設され、環境システム学科と地理学科の 2 学科が設置された。

地球環境科学部は、自然科学から人文・社会科学までの領域において、地球全体のマクロから地域社会のミクロスケールにわたる環境問題の解決に貢献できる有為な人材を育成することを目的に現在に至る

環境システム学科

平成 10 年、熊谷キャンパスに地球環境科学部が開設されると同時に設置された。立正大学においては初めての理系学科である。

環境システム学科では、自然科学的な視点からさまざまな環境問題を解決するための人材育成を主としている。

また物理学、化学、生物学、地学といった理系の知識だけでなく、地理学、社会学、経済学などの知識も要するため多岐にわたるカリキュラムが設けられている。

地理学科

地理学科の歴史は大正 14 (1925) 年 1 月 28 日、立正大学専門部に宗教科、国語漢文科とともに開設された歴史地理学科にはじまる。当時、地理学を置く大学は、東京帝国大学や京都帝国大学のみで、私立大学においては立正大学がはじめてである。

環境科学研究所

環境科学研究所は平成 10 年 4 月、学部専任教員を所員とし、地球環境科学部の研究の活性化と成果の社会への還元を目的に開設された。

主な事業内容は、学外機関との共同研究の促進、学部内施設・装置を利用しての分析依頼の窓口、学会等の開催支援、市民への研究成果還元のための公開講演会の開催である。

平成 11 年 3 月より年 1 回、『立正大学地球環境科学研究所年報』を発行していたが、平成 17 (2005) 年 3 月よりそれまで学部、大学院研究科、研究所個々で発行していた紀要を学部紀要として平成 11 年 3 月から発行していた『地球環境研究』に統合した。



第 43 図 地球環境科学部の授業風景
(溶岩路頭のスケッチ観察、下岡順直助教提供)

(4) 地域との連携

立正大学では平成 23 (2011) 年 4 月、旧総合研究機構と産学官連携推進センターを統廃合し、新たに研究推進・地域連携センターを発足した。同センターではキャンパス所在の地域を中心に大学のもつ知的財産や、教育・研究活動を地域へ還元するための連携事業が行なわれている。

立正大学オリジナル日本酒製作

平成 25 年度より、熊谷市内で唯一の日本酒製造メーカーである権田酒造株式会社と本学学生が連携し、立正大学オリジナルの日本酒を制作するプロジェクトが行なわれている。

このプロジェクトはものづくりの現場での経験を通じて「卒業後に求められる人間力」や「他者と一緒に目標を達成する力」を伸ばすことを目的に行なわれている。参加者は品川キャン

スと熊谷キャンパスの両方から募集し、学部の垣根を越えた取り組みがなされた。

プロジェクトではコンセプトの立案から日本酒のブレンド、商品名の考案やラベルの制作も行なわれた。

子ども大学くまがや

子ども大学くまがやは、子どもの学ぶ力や生きる力の向上、地域の教育力の向上を目的に大学、行政、教育委員会、青年会議所などが連携し学習の機会を提供することを目的に行なわれている。

本学からは、熊谷キャンパス学部所属の教員を派遣している。

観光まちづくりへの貢献

平成 24 年度より地球環境科学部地理学科(片柳ゼミ)では、熊谷市妻沼地区を対象に観光まちづくりへの貢献をテーマとした地域連携を進めている。

連携の目的は①道の駅「めぬま」と国宝・妻沼聖天山の 2 つの核を結びつけた地域活性化②課題発見と課題解決型の人間形成である。

主な活動内容は①地域課題の把握と観光情報の発信②地域資源の発掘に関する調査③観光資源マップの作成である。



第 44 図 妻沼まちあるきマップ
(地球環境科学部 地理学科 片柳勉教授提供)



第 45 図 マップ作成に向けて検討する学生
(地球環境科学部 地理学科 片柳勉教授提供)

4. 学生生活

星霜祭

立正大学の大学祭には、品川キャンパスで行なわれる橘花祭と熊谷キャンパスで行なわれる星霜祭があり、毎年10月下旬から11月上旬に開催され、今年度30回目を迎える。

星霜祭のはじまりは昭和61（1986）年、開校120周年を節目に大崎キャンパス再開発工事が計画されたことに端を発する。

当時、大崎キャンパスでは1部・2部の橘花祭が行なわれていた。しかし工事期間中は手狭になるキャンパスでの同時開催に支障が生じることが予想され、渡邊寶陽学長（第23・25代）と当時、学生部長であった高村弘毅教授（第29・30代学長）の下、学園祭の継続開催が検討され、学生団体との協議が行なわれました。その結果、工事竣工までは大崎キャンパスにて2部の橘花祭を昼間開催し、熊谷キャンパスにて熊谷祭と1部の橘花祭の合同開催が決定した。

大崎キャンパス再開発竣工後、1部橘花祭・熊谷祭実行委員会や各学生団体は協働連携を礎に、熊谷キャンパスで星霜祭の継承を決定し、昭和63（1988）年、第1回星霜祭が「Dreamin'～夢をわすれかけてる少年たちへ～」をテーマに開催された。また星霜祭のメインイベント「スター公演」ではアーティストを迎えたコンサートが盛大に行なわれた。

強化クラブ

立正大学では学生に最も親しまれているスポーツを振興することで、学生の愛校心を高め学園生活をより豊かにすることを目的に「強化クラブ」を発足させた。

昭和60（1985）年に硬式野球部、サッカー部、ラグビー部を対象クラブとして指定し、硬式野球部は法学部、サッカー部は経営学部、ラグビー部は経済学部が学生を受入れ、強化クラブ活動と学業が両立できるよう図られた。

平成10（2004）年には受入学部を熊谷キャンパス開設学部とし、原則的に野球部は法学部、サッカー部は地球環境科学部、ラグビー部は社会福祉学部となった。

昭和60年以降、強化クラブはおおよそ4年ごとの指定が行なわれ、現在に至る。



第46図 人工芝に敷かれたラグビー場

(1) 硬式野球部

硬式野球部は昭和24(1949)年、戦後の混乱が残るなか東京六大学加盟校や東都大学連盟加盟校などの野球部復活を受け、同好会として発足した。

昭和34(1959)年、日本大学野球界を代表するリーグである東都大学野球連盟準加盟2部に加入した。当時の加盟校には一橋大学、東海大学、順天堂大学などが名を連ね、昭和35(1960)年には初めて春・秋通じてのリーグ戦に出場した。昭和38年には準加盟2部リーグで初優勝し、準1部に昇格した。

昭和39年、全日本大学野球連盟の地域編成により、7大学が脱退したために、東都大学野球連盟の加盟校は21大学となった。これを受け、準加盟制度が廃止され加盟校21大学による4部制がはじまり、硬式野球部は念願の東都大学野球連盟3部に昇格した。昭和41年には秋季リーグ戦3部で優勝し、2部昇格を果たした。

昭和42年、東京都三鷹市に合宿所「天晴寮」が建設された。昭和59年秋季リーグ戦において2部初優勝をおさめた。昭和55年、それまで三鷹市に置かれていた合宿所が熊谷キャンパスに移設された。

平成3年には2度目の2部優勝を果たすが、1部・2部入れ替え戦で敗戦する。2年後の平成5年、2部優勝し入れ替え戦にて東京農業大学を下し1部初優勝を果たす。

平成5年以降、1部・2部の行き来を繰り返すも、平成9年には秋季リーグにて初のAクラス入りをする。

平成21年には悲願の1部初優勝を果たし、同年秋、全国大会である明治神宮野球大会において初出場初優勝、「大学日本一」という快挙を成し遂げた。

卒業生の活躍

東都大学リーグからは多くのプロ選手を輩出しているが、立正大学からも西口文也氏(現西武ライオンズ選手コーチ)、武田勝氏(現日本ハムファイターズ球団職員)、南昌輝氏(現ロッテマリーンズ投手)、吉田裕太氏(現ロッテマリーンズ捕手)、黒木優太氏(現オリックス・バファローズ投手)などが活躍している。

	(リーグ)	春季	順位	入替戦	(リーグ)	秋季	順位	入替戦	仏教系四大学
昭和55(1980)年	2部	5勝6敗	4位		2部	4勝6敗	4位		
昭和56(1981)年	2部	5勝7敗	4位		2部	4勝6敗1分	4位		
昭和57(1982)年	2部	7勝5敗2分	3位		2部	5勝8敗1分	5位		
昭和58(1983)年	2部	7勝4敗	3位		2部	6勝7敗1分	4位		
昭和59(1984)年	2部	2勝8敗1分	5位		2部	9勝3敗	1位	敗退	
昭和60(1985)年	2部	8勝5敗	3位		2部	7勝6敗	4位		
昭和61(1986)年	2部	3勝7敗	4位		2部	6勝7敗	3位		
昭和62(1987)年	2部	4勝6敗	5位		2部	8勝7敗	3位		
昭和63(1988)年	2部	7勝5敗	2位		2部	2勝8敗	6位	残留	
平成元(1989)年	2部	2勝10敗1分	6位	残留	2部	0勝10敗1分	6位	残留	
平成2(1990)年	2部	4勝9敗1分	5位		2部	7勝5敗	2位		優勝
平成3(1991)年	2部	6勝6敗	3位		2部	8勝3敗	1位	敗退	
平成4(1992)年	2部	7勝5敗2分	2位		2部	10勝1敗1分	1位	敗退	優勝
平成5(1993)年	2部	5勝7敗1分	5位		2部	10勝2敗2分	1位	昇格	
平成6(1994)年	1部	2勝10敗	6位	降格	2部	10勝3敗	1位	昇格	
平成7(1995)年	1部	6勝7敗	4位		1部	6勝7敗	4位		
平成8(1996)年	1部	4勝8敗1分	5位		1部	2勝8敗	6位	残留	
平成9(1997)年	1部	4勝7敗	5位		1部	5勝7敗	3位		
平成10(1998)年	1部	6勝7敗	3位		1部	0勝10敗2分	6位	降格	
平成11(1999)年	2部	7勝6敗	3位		2部	10勝1敗1分	1位	敗退	
平成12(2000)年	2部	10勝2敗3分	1位	敗退	2部	5勝7敗2分	4位		
平成13(2001)年	2部	6勝5敗1分	3位		2部	8勝2敗	2位		
平成14(2002)年	2部	1勝10敗1分	6位	残留	2部	7勝6敗1分	3位		
平成15(2003)年	2部	8勝6敗1分	2位		2部	6勝6敗	2位		
平成16(2004)年	2部	7勝7敗	4位		2部	5勝7敗	5位		
平成17(2005)年	2部	9勝3敗3分	1位	昇格	1部	6勝8敗	5位		
平成18(2006)年	1部	4勝9敗	6位	降格	2部	3勝9敗	5位		優勝
平成19(2007)年	2部	10勝3敗2分	1位	昇格	1部	5勝7敗	5位		
平成20(2008)年	1部	6勝5敗	3位		1部	5勝6敗	4位		
平成21(2009)年	1部	2勝10敗1分	6位	残留	1部	9勝4敗	1位	優勝	
平成22(2010)年	1部	4勝10敗	6位	降格	2部	6勝7敗	4位		優勝
平成23(2011)年	2部	6勝7敗	3位		2部	6勝6敗1分	3位		優勝
平成24(2012)年	2部	5勝7敗	5位		2部	6勝7敗	3位		
平成25(2013)年	2部	5勝8敗2分	5位		2部	7勝6敗1分	3位		
平成26(2014)年	2部	9勝3敗	1位	敗退	2部	5勝7敗	3位		優勝
平成27(2015)年	2部	4勝8敗	5位		2部	6勝7敗	5位		優勝
平成28(2016)年	2部	9勝2敗	2位		2部	8勝4敗1分	2位		優勝
平成29(2017)年	2部	10勝0敗	1位	昇格	1部	現在			優勝

第47図 野球部戦績

(2) ラグビー部

ラグビー部は昭和 40（1965）年、有志が集まり愛好会として発足し、昭和 41 年に体育会に加盟し同好会に昇格した。昭和 42 年には体育会において部に昇格し、部長に村岡克也氏が就任した。翌年には全国地区大学対抗戦に加盟し、公式戦がはじまった。

地区対抗戦に加盟後、昭和 57 年には関東ラグビーフットボール協会の関東大学リーグ戦に加盟した。このリーグ戦では 3 部優勝をし入替戦にて國學院大学に勝利、2 部に昇格した。

地区対抗戦では昭和 57 年に関東 1 区で優勝し、全国大会に出場している。その後昭和 61（1986）年に地区対抗戦から脱退している。

同年、立正大学強化クラブに認定され、現在に至る。平成 8（1996）年には熊谷キャンパスにラグビー部寮が完成し、受入学部が経済学部から社会福祉学部へと変更となった。平成 16（2004）年、1 部に初めて昇格したが、平成 19（2007）年に 2 部降格。現在、1 部復帰

を目指し、日々練習に励んでいる。

平成 26（2014）年 4 月、本学ラグビー部の女子部員を中心に大学生や社会人で構成する国内初の産官学連携の女子セブンズラグビークラブチーム「アルカス熊谷」が誕生した。平成 28 年には立正大学創立 144 年のなかで初めて、現役学生 2 名がリオデジャネイロ・オリンピックラグビー女子の選手に選出された。また今年度は女子ラグビーワールドカップ 2017 アイルランド大会に現役学生 3 名が日本代表に選出されるなど数々の実績を残している。

また平成 20（2008）年からは、熊谷市民へのラグビーの普及とラグビーを通じた交流、ジュニア指導による学生の社会貢献と人間的成長を図ることを目的に、ラグビーフェスティバルを開催している。同フェスティバルでは市内の小中学生からシニアまで幅広い世代の方を対象にパスやトレーニング方法を部員らが指導するなど、地域貢献が活発に行なわれている。

年	出来事	年	出来事	年	出来事
1965(昭和40)年	泉原日聖表が立ち上げ愛好会で発足 部長に坂藤秀一就任[1966(昭和41)年まで] 監督不在[1967(昭和42)年まで]	1984(昭和59)年	リーグ戦2勝6敗7位 地区対抗(ジュニア)予選ブロック優勝 決勝トーナメント2回戦敗退	2002(平成14)年	リーグ戦6勝1敗3位
1966(昭和41)年	体育会に加盟し同好会に昇格	1985(昭和60)年	リーグ戦4勝4敗5位 地区対抗(ジュニア)予選ブロック優勝 決勝トーナメント1回戦敗退	2003(平成15)年	リーグ戦5勝2敗3位
1967(昭和42)年	体育会において部に昇格 ラグビー協会登録 部長に村岡克也就任[1978(昭和53)年まで]	1986(昭和61)年	リーグ戦4勝3勝1分4位 地区対抗戦敗退 立正大学特別強化クラブに指定される	2004(平成16)年	リーグ戦7勝0敗優勝 1部入替戦勝利(拓殖大学34-24)1部昇格
1968(昭和43)年	全国地区大学対抗戦加盟 監督に泉原日聖素就任[1974(昭和49)年まで]	1987(昭和62)年	リーグ戦4勝4敗5位	2005(平成17)年	1部リーグ戦1勝6敗8位 1部入替戦勝利(拓殖大学31-17)1部残留 4月にラグビー場人工芝になる
1969(昭和44)年	予選ブロック敗退	1988(昭和63)年	リーグ戦5勝3敗4位	2006(平成18)年	1部リーグ戦1勝6敗7位 1部入替戦勝利(埼玉工業大学29-15)1部残留
1970(昭和45)年	地区対抗0勝4敗、予選ブロック敗退	1989(平成元年)	リーグ戦5勝3敗4位	2007(平成19)年	1部リーグ戦1勝6敗8位 1部入替戦敗退(日本大学10-21)2部降格 2部リーグ戦6勝0敗優勝
1971(昭和46)年	地区対抗0勝4敗、予選ブロック敗退	1990(平成2)年	リーグ戦4勝4敗5位	2008(平成20)年	1部入替戦敗退(大東文化大学5-30)2部残留 部長に山口雅功就任[2012(平成24)年まで]
1972(昭和47)年	地区対抗3勝1敗、予選ブロック敗退	1991(平成3)年	リーグ戦5勝3敗3位 ニュージランド遠征	2009(平成21)年	2部リーグ戦6勝1敗2位 1部入替戦敗退(大東文化大学17-33)2部残留
1973(昭和48)年	地区対抗3勝1敗、予選ブロック敗退	1992(平成4)年	リーグ戦7勝1敗2位、1部入替戦なし	2010(平成22)年	2部リーグ戦7勝0敗優勝 1部入替戦敗退(拓殖大学17-45)2部残留
1974(昭和49)年	地区対抗0勝4敗、予選ブロック敗退	1993(平成5)年	リーグ戦6勝1敗2位 1部入替戦敗退(国士館大学14-18)2部残留	2011(平成23)年	2部リーグ戦7勝0敗優勝 1部入替戦敗退(拓殖大学21-27)2部残留 初の女子ラグビー部員入部
1975(昭和50)年	地区対抗0勝4敗、予選ブロック敗退 監督に根本光就任[1978(昭和53)年まで]	1994(平成6)年	リーグ戦6勝1敗2位 1部入替戦敗退(国士館大学12-17)2部残留	2012(平成24)年	リーグ戦7勝0敗優勝、部長に大竹智就任[現在に至る] 1部入替戦勝利(関東学院大学40-17)1部昇格
1976(昭和51)年	地区対抗2勝2敗、予選ブロック敗退	1995(平成7)年	リーグ戦3勝3敗3位 ニュージーランド遠征	2013(平成25)年	1部リーグ戦2勝5敗4位 1-2部入替戦(関東学院大学27-22)1部残留
1977(昭和52)年	地区対抗1勝3敗、予選ブロック敗退	1996(平成8)年	リーグ戦3勝4敗6位	2014(平成26)年	1部リーグ戦0勝7敗8位 1-2部入替戦(拓殖大学29-34)2部降格
1978(昭和53)年	地区対抗0勝4敗、予選ブロック敗退	1997(平成9)年	リーグ戦4勝3敗4位	2015(平成27)年	2部リーグ戦5勝2敗3位
1979(昭和54)年	地区対抗2勝2敗、予選ブロック敗退 部長に中西直行就任[1982(昭和57)年まで] 監督に三沢一輝就任[1998(平成10)年まで]	1998(平成10)年	リーグ戦3勝3敗3位	2016(平成28)年	2部リーグ戦5勝2敗2位
1980(昭和55)年	地区対抗3勝1敗、予選ブロック敗退	1999(平成11)年	2部入替戦勝利(国学院大学64-7)2部昇格 地区対抗関東1区決勝トーナメント優勝 全国大会1回戦敗退		
1981(昭和56)年	地区対抗3勝1敗、予選ブロック敗退	2000(平成12)年	リーグ戦4勝3敗4位 初の女子マネージャー入部		
1982(昭和57)年	関東大学リーグ戦加盟、3部リーグ戦優勝 2部入替戦勝利(国学院大学64-7)2部昇格	2001(平成13)年	リーグ戦5勝2敗3位		
1983(昭和58)年	地区対抗(ジュニアが参加)予選ブロック優勝 決勝トーナメント2回戦敗退 部長に福岡克也就任[1995(平成7)年まで]				

第 48 図 ラグビー部戦績

(3) サッカー部

サッカー部の創設年は不明だが、『関東大学サッカーリーグ戦第70回大会記念誌』によると、昭和3(1928)年、関東大学リーグへの加盟を申請したものの、却下されたとの記述がある。

昭和37(1962)年、立正大学ア式蹴球部として再建された。昭和50(1975)年には強化クラブとして認定を受け、さらに同年、東京都大学リーグ3部にて優勝した。昭和50年には東京都大学リーグにて2部優勝、昭和52年には1部で準優勝し関東大学リーグにおいても活躍した。また同年、熊谷キャンパス内にサッカー部の合宿所が建設された。

昭和53(1978)年から平成6(1994)年にかけてサッカー部の宣伝と強化を目的に立正フェスティバルが開催された。

受入学部は平成7年までは経営学部であったが、地球環境科学部が熊谷キャンパスに開設されたのを機に、平成11年に同学部地理学科

が受入学部となった。合宿所は旧ユニデンスを使用していたが、平成23(2011)年に旧仏教学部寮を改修し、合宿所とした。平成17年に、グラウンドを人工芝に改修した。このグラウンドはFIFA推奨JFA公認グラウンドに認定されており、秋のリーグ戦など数多くの公式戦が開催されている。また照明設備も充実し、夜間練習にも対応している。

卒業生の活躍

卒業生の中にはJリーグ1部・2部やJFLなどで活躍している選手が多数いる。

なかでもモンテネグロリーグの強豪クラブ、FKルダルに移籍した山本弘明氏やアルビレックス新潟や大宮アルディージャなどに所属し、今年引退を発表した安英学氏などいる。

安英学氏は平成22(2010)年10月、FIFAワールドカップに出場するなどプロサッカー選手として広く活躍したとして、立正大学第1回モラリス賞を受賞している。

年	所属・成績・出来事	受入学部
昭和50年	東京都大学リーグ3部優勝。強化クラブ認定	経営学部
昭和51年	東京都大学リーグ2部優勝	
昭和52年	東京都大学リーグ1部2位。関東大学リーグ入替戦勝利。熊谷キャンパスに合宿所建設	
昭和53年	関東大学リーグ2部6位。立正フェスティバル開催	
昭和54年	関東大学リーグ2部6位	
昭和55年	関東大学リーグ2部6位	
昭和56年	関東大学リーグ2部3位	
昭和57年	関東大学リーグ2部4位	
昭和58年	関東大学リーグ2部6位	
昭和59年	関東大学リーグ2部7位	
昭和60年	関東大学リーグ2部8位。関東大学リーグ入替戦出場	
昭和61年	東京都大学リーグ1部2位	
昭和62年	東京都大学リーグ1部優勝	
昭和63年	東京都大学リーグ1部2位	
平成元年	東京都大学リーグ1部2位	
平成2年	東京都大学リーグ1部優勝	
平成3年	東京都大学リーグ1部優勝	
平成4年	東京都大学リーグ1部2位	
平成5年	東京都大学リーグ1部2位	
平成6年	東京都大学リーグ1部3位	
平成7年	東京都大学リーグ1部4位	

年	所属・成績・出来事	受入学部
平成8年	東京都大学リーグ1部4位。	社会福祉学部
平成9年	東京都大学リーグ1部優勝。東京都サッカートーナメント優勝。関東大学サッカー大会優勝。関東大学リーグ入替戦出場	
平成10年	東京都大学リーグ1部優勝	
平成11年	東京都大学リーグ1部優勝。合宿所移転	
平成12年	東京都大学リーグ1部3位。東京都大学連盟1・2部春季対抗戦優勝。関東大学サッカー大会優勝。関東大学リーグ入替戦勝利	地球環境科学部 地理学科
平成13年	関東大学リーグ2部7位。関東大学リーグ入替戦敗退	
平成14年	東京都大学リーグ1部3位。東京都大学連盟1・2部春季対抗戦優勝。関東大学サッカー大会優勝	
平成15年	東京都大学リーグ1部7位。ジェフユナイテッド市原・千葉業務委託契約(平成8年まで)	
平成16年	東京都大学リーグ1部7位。東京都大学連盟1・2部春季対抗戦優勝	
平成17年	東京都大学リーグ1部優勝。東京都サッカートーナメント優勝。関東大学サッカー大会優勝	
平成18年	関東大学リーグ2部11位	
平成19年	東京都大学リーグ1部5位	
平成20年	東京都大学リーグ1部4位。関東大学サッカー大会出場	
平成21年	東京都大学リーグ1部2位。東京都サッカートーナメント優勝。関東大学サッカー大会2位。関東大学サッカー大会昇格決定戦出場	
平成22年	東京都大学リーグ1部2位。東京都大学連盟1・2部春季対抗戦優勝。関東大学サッカー大会1位。関東大学サッカー大会昇格決定戦出場	
平成23年	東京都大学リーグ1部8位。合宿所移転(旧仏寮)	
平成24年	東京都大学サッカーリーグ戦1部4位	
平成25年	東京都大学サッカーリーグ戦1部5位	
平成26年	東京都大学サッカーリーグ戦1部5位	
平成27年	東京都大学サッカーリーグ戦1部3位	
平成28年	東京都大学サッカーリーグ戦1部3位	

5. 特 論

熊谷キャンパス 50 周年記念

立正大学名誉教授 高村弘毅

熊谷キャンパスが開校されたのは 1967 年 4 月のことでした。小生が講師になって 1 年目の時でした。大学内の教職員、学生のことは後述することにして、当時、以前の熊谷週辺の環境について地図をもとに若干触れておきたい。

第 1 図は明治 16 年発行、1：20,000 縮尺の大里郡熊谷駅、村岡村図幅（原図を縮小、

以下、地図も同様）である。当時は中仙道の宿場町として羽生町道や川越町道なども集まり大いに栄えていた。交通は、明治 16 年に鉄道が敷設され停車場が出来（図幅にはまだ描画されていない）、それまで町は商業都市の性質が強く、馬車駅の性格をおびた町から鉄道を中心とする街に変化した。従って、街は中仙道や周辺の集落からの支道が集まる都市で、馬車による人物の運搬が重要な役割を果たして発展したものと推敲する。立正大学が立地している谷は、地図上では熊谷駅至の文字「至」より少し北西の黄色い部分（標高 49.46 m の南側）で、江



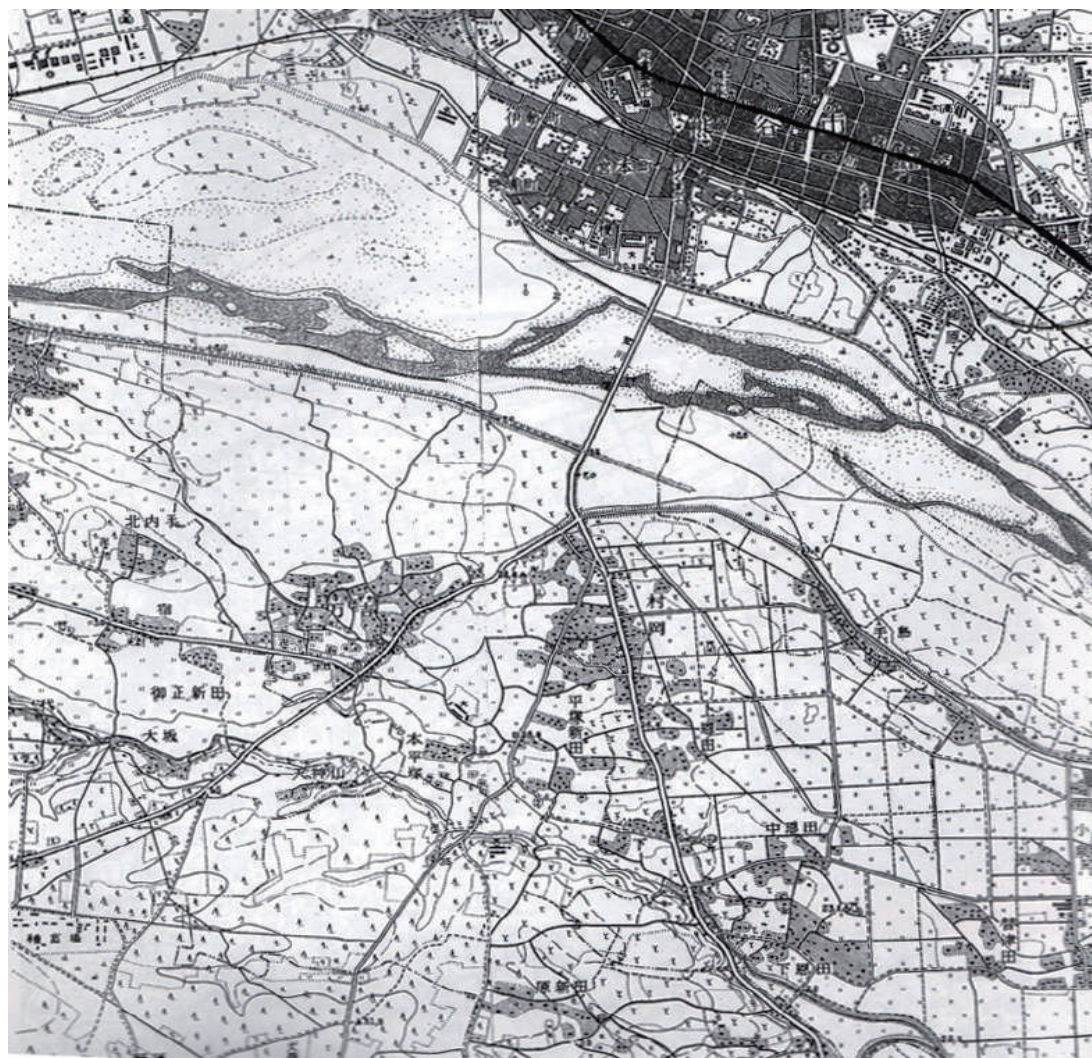
第 1 図 大里郡熊谷駅、村岡村図幅（明治 16 年発行 1：20,000）

南台地を侵食した和田川の小支流(湿地)であった。行政的には男衾群(おぶすまぐん)に所属していて、少し離れた南の位置に文殊寺とその門前集落として発達した管村が展開していた。荒川は不十分な堤防があるものの、網状流の状態が鮮明に表れており、正しく暴れ川の荒川らしい姿が図上でも判る。

第2図は昭和32年に国土地理院が発行した1:25,000の熊谷・三ヶ尻の図幅である。当地の熊谷市街地は国道17号を挟んで発展しているが、鉄道は市街地の南端を国鉄や秩父鉄道が忌避された形で敷設されている。市街地には

片倉製糸工場が進出し、河川敷は桑畑に利用されているところから養蚕業が盛んであったことを伺わせる。

立正大学の位置は標高51.9mの北の標高50m線で囲まれた谷の湿地と畑に利用されている。周りに果樹園・針葉樹・落葉樹・桑畑が展開している。



第2図 熊谷、三ヶ尻図幅 (昭和32年発行 1:25,000)

第3図は平成18年時の国土地理院発行の1:25,000の三ヶ尻図幅である。

立正大学の位置が明瞭に描画されている。埼玉県農林総合研究センター、総合教育センターが江南地域に移転し、熊谷自動車道路が未だ有料であったようであるが、熊谷大橋が出来、河川敷の過っての桑畑がゴルフ場になり、荒川右岸の荒川大橋近傍にはリンテック工場や日本ヒューム管などから成る工場地帯が形成している。籠原地区にも大規模な企業が進出している。

さて、立正大学の熊谷キャンパスが1967年に発足して2017年は50周年、30年後の1987年に地球環境科学部が発足して20年目になります。あの荒れた土地に投資してかくも大きくなったものだと思う。当時の財政からすると、歴代の学園経営者は血の出る思いで努力されたものだと思います。深く感謝申し上げます。また、このキャンパスで教学に励んだ学生諸氏にも心から敬意を表する次第である。



第3図 三ヶ尻図幅 (平成18年発行 1:25,000)

加えて、50年前の熊谷キャンパス開発当時の状況について、土地柄を少し紹介しておきたい。この土地は松林と畑と田んぼ、蓮田（現在の本部棟の）だけでした。林や臨床にはゴイサギや小綬鶏、不如帰、マムシなどがおりました。最初の建物は蓮田の傍にお粗末な小型の平屋プレハブ一棟を造り工事事務所と事務に併用していた。今の野球部が入っている館「旧ドミトリージェストハウス」のあたりに旧弓道部道場があり、その近くの小屋に管理人・兼マムシ取りの方が住んでいた。教育施設としては専門学校が出来、次いで大崎から短期大学が移転し富士電機(?)の女子会社員が多数夜に通っていただいております。殺風景な熊谷キャンパスの華やかな姿が思い浮かべる。その後、短期大学部（社会科・社会福祉）と名称替えし、やがて現在の社会福祉学部に移りました。社会福祉学部の歴史こそが熊谷の歴史です。熊谷キャンパスの教育システムの今後の在り方と、熊谷の学生を置き去りにしたような都心指向は、教育精神に矛盾し甘受できない。現学長はこの問題の整理に追われることでしょう。

話が道を逸れてしまったのでもとに戻しましょう。立正大学学園から小生が依頼されて当該測量を行うことになった。近くに泊まる場所が無くて閉口したが、佐藤敏夫先生（中央大学工学部専任教授・立正大学非常勤講師）の協力のもと山辺功二、寺田 稔、学生、高村などで地形測量を実行し、その成果を立正大学学園に納品した。当時は近くには文殊寺しか建物がなく、山中の連れ込み旅館に泊まって実施したもののだが、学部の学生には夜間熟睡できたかどうか案じたものの、仕事に影響がないことを願っていた。気のせいもあって、当時有名であった市内の今井旅館に1, 2泊泊まることにした。購入当時は敷地予定地内に土地所有者が何人に

も分かれていた。そこで代替え地を「揚井地方」に約20軒分用意しなければならなかった。当時、大学は手当、給料の遅配をし、銀行も融資できない状況下であり、財政上頻拍していた。このことについては誰でも口にしますが、困ったときの神頼みについては誰も触れない。大学学園がとった方法に協力した方々についても記述しておきたい。それは、学内の有志に呼びかけて代替え地の用地を銀行にローンを組ませて販売した。その資金が10年間大学の担保替わりに塩漬けになっており払い戻すことが出来なかった。電気・ガス・水道などのインフラが用意されることであったが調整区域の土地であったため、10年後自己負担でインフラ整備を行ったという。銀行が破産寸前の大学に融資しなくなったこの時期に、約20人の大学融資者が持ち金を足利銀行に担保に10年間預けられて大学の救済を協力したことである。このことについては「大学創立記念誌」を何回発行しても記録を1度も書かれていないのは残念なことである。このようなことも記念誌にこそ大学が大変な時に協力したものを記録しておくべきである。

次に、熊谷キャンパスにとって重要なことは、地球環境科学部が日本で初めて作られた時代に即応した学部であること、発足して20年目になることである。

当時の大崎キャンパスには理系の学部を作るスペースがなく、他に新たに土地を探す以外に方法がなかった。しかし、社会の状況は地域環境、地球環境が極めて脆弱になっており看過できない状況にあった。この点、この機を逃しては社会に公害問題などに呼応できないと判断しての新施策である。いろいろと違った意見をもっている方もいるようだが、それは本学にとって知名度を上げることの知見からすると勘違いして

いるように思う。熊谷市のような 30 万都市で 3 学部の運営、維持が出来ないとすると、学部の運営、教育、教員の教学姿勢などに問題があることになり修正する必要があると思う。特に新任の先生方は地球環境科学部を申請した時の申請書を真摯に読み直してみる必要がある。学部の人事は、新任人事に合わせたカリキュラムを開講するものではなく、既存のカリキュラムを担当できる教員を充足する努力が必要である。大学の伝統とは何かを考えてみる必要がある。もちろん時代の動向を把握したカリキュラムの更新は欠かせないことは言うまでもない。

さて、この機に忘れかけている学部発足当手を思い出しながら少し触れておきたい。地球環境学部の発足には準備委員長として、文学部地理学科の方々にはもとより学内、学外の企業界などのご協力を得て何とか発足できました。特に日本測量協会の方々や、西村蹊二関東支部会長には特段とお世話になりました。また、この裏付けとなった東京大学生産工学研究所丸安研究室やアジア航測(株)の皆川忠二郎先生には私立大学で本学のみ有する一級図化機(WILD製 A-7 型、二級図化機 B-8 型)を大学院生や学生に使い方を教授し、メンテナンスも定期的に行ったことは当時の日本の大学教育にとって類を見ないものであった。学生を飛行機に乗せ、航空測量の体験を積ませたことは立正大学地球環境科学部の原点である今日のアクティブ・ラーニングではなかろうか。また、国際航業(株)が本学の P-30 カメラにより大阪万博に展示した富士(株)の日本で初めての風船ドームパビリオンが風圧で変形する状態を計測して、その成果を各方面に発表したことは地上測量法に大

きな変革をもたらした。これこそが今日の立正大学が目指す日蓮上人の眼目とする「モラリストを備えたエキスパート」を育む大学であろう。このことについてはいずれ時期が来ましたら詳しく記録を残しておきたい。

立正大学応用地理測量学研究会の OB 会である白馬会が今年、創設 50 周年になりまことに感無量である。副測量士の方々はやがて測量士、土地家屋調査士、各種技術士など、資格を多数の方々が取得し、わが国の土木企業・地球環境関係の予防と対策に大いに活躍しことは、立正大学の社会における知名度の高揚に貢献した。ポストドクターの多い今日、学位会にも勝るとも劣らぬ 50 年間の努力に衷心より感謝申し上げる次第である。

【参考文献】

1. 立正地理学位会誌「地理情報」(平成 29 年度)
2. 立正大学応用地理測量学研究会 OB 団体(白馬会) 40 年周年記念誌(坂本) 2017 年 10 月 25 日

40年の時を越えて 熊谷が原点

長野県 田中 浩
(昭和 55 年度文学部地理学科卒)
(長野県立長野東高等学校長)



田中 浩氏

昭和 52 年 4 月、熊谷キャンパスで大学生活が始まった。市内石原の木造アパートから八木橋前のバス停まで徒歩。荒川を渡ると、車窓にコンクリート打ちっばなしの、当時としては斬新なデザインの立正大学が見えてくる。砂利敷きのバスロータリーで下車する。

入学当時、ほぼ全学部が、「首都圏出身者以外は熊谷で学生生活をスタート」する方式だった。だから、熊谷は地方出身者であふれていた。在籍した地理学科でも、生のサトウキビをおやつにかじる奄美出身者もいれば、大雪山を遥かに臨む旭川が地元という者も。教室では、東北～九州、日本全国のお国言葉が聞こえてくる。

40 年前の入学時を思い出してみる。大学は、熊谷市とは名ばかり(?)の、丘陵地帯にある。広大な敷地の南半分は当時の江南村。キャンパスは雑木林に覆われ、タヌキも住んでいた。でも校舎はコンパクトにまとまって、講義ごとの移動も楽ちんだったと記憶する。



食堂が入っていた当時の福利厚生棟

数年前、友人と熊谷キャンパスを再訪して、あまりの変わりように吹っ飛んだ。一番安いハムエッグ定食で毎日糊口をしのいでいた学食(2階建て)は、ステラに役目を渡しすでに跡形もない。保専の校舎も社会福祉学部のビル群に変貌した。アカデミックキューブも視界を遮る。40 年前当時の面影が残るのは、タイル張りに化粧直したゲートプラザにだけ。

ステラの中も、自分の学生時代とは重ならない。ハムエッグ定食もメニューにない。キャンパスで楽しそうに語らう現学生たちが、羨ましく、眩しかった。

秋になると、毎年熊谷を訪れる。関東大学リーグ戦観戦に熊谷ラグビー場、と、学生時代の仲間と 40 年続く年末の宴会。熊谷に来ると、肩の力が抜ける。間もなく還暦を迎える自分の原点は、熊谷キャンパスと、当時からず～っと続く人との繋がりだ。前回大学を訪れた折、ゲートの守衛さんは熊谷訛りで、暖かく老卒業生を迎え入れてくださった。今年も熊谷キャンパスに立ち寄ってみよう。変化と成長を続ける母校を、遠く長野の地から応援している。

「されど学駐」

元職員 古川史典

大学内には、学食、学祭、学バス、学割など多くの「学」が付いた略語があります。その中でも熊谷校舎ならではの「学」として、“学寮、学駐”があげられます。

数多くある「学」のなかでも「学駐」とは学生駐車場の略で、熊谷校舎の北西の野球・サッカー場の裏手に所在します。当時、他大学では類をみない広い敷地をもち、車約 400 台バイク・自転車約 100 台を置くことができました。現在では、さらに野球部・サッカー部の合宿所跡が砂利の駐車場として活用されています。

私が担当した当時の「学駐」は、県道から外周道路に進入し砂利敷きで穴だらけのまさに林道でした。片側には車両が一行で駐車し、外周道路を約 400 m 通り抜け入口にたどり着くと手前の「下の駐車場」に入ることができましたが、常に満車状態でした。

ある年には、学生が学駐でオイル交換をしていいかと窓口に来ました。「邪魔にならない用にね」と話すと「学駐に来る学生からお金を取ってオイル交換するのですが」「それは商売だよね！それはできません」そのようなユニークなやりとりもありました。

若き学生生活を熊谷校舎で過ごした人達は、数ある思い出の中でも「学駐」と聞けば、“あー”と思い出しうなずくでしょう。そこが「されど学駐」。

「熊谷キャンパスでの思い出」

博物館非常勤職員
浅見幹雄

私は昭和 50 年に短期大学の事務職員となり、約 40 年間熊谷校舎に勤務しました。過去を振り返ると熊谷校舎には教養課程があり、学生たちは必要単位を修得しないと大崎の専門課程に進級できない制度がありました。進級発表の時は、現在のゲートプラザの廊下に進級発表者の掲示をしましたが、約 1 割の学生は毎年進級不合格になっていました。

進級不合格者は熊谷に 1 年間留年するので、当時の職員や学生達の間で熊 3（クマさん）と呼ばれていました。中には次の年も進級できず熊 4 の学生も数名いた記憶があります。また学部によっては仮進級制度があり、3 科目までであれば仮に不合格になっても大崎に進級させていました。仮進級者は大崎の 3 年生にはなれますが、条件として落とした科目を熊谷まで通って修得しなければなりません。このような学生を「通い熊の学生」と呼んでいました。

また、学食も今のように充実していたわけではありませんでした。その代わり地域が大学と共に生活を担っていて、現在のバスロータリーの前に「飯田家」と「さつき」食堂があり、よく、さつき食堂の「サンマーメン」を食べました。小じんまりとした食堂でしたが、家族ぐるみで店をきりもりし、たまに行くと店主の親父が酔っ払って上機嫌だった記憶もあります。過去 50 年の熊谷キャンパスには大崎キャンパスには無いローカルな思い出が沢山あります。

熊谷キャンパス略史年表

年	事 項
昭和 39 (1964) 年	2月11日 立正大学第 68 回理事会にて熊谷キャンパス開設が決定
	5月19日 熊谷キャンパス開設工事開始
	7月22日 立正大学誘致促進委員会結成。熊谷市議会議員・江南村村長・地元区長・商工会議員ら 29 名が大崎校舎へ来校
昭和 40 (1965) 年	5月8日 熊谷キャンパス予定地見学
	7月21日 運動場一部竣工
	8月1日 合宿寮竣工
	9月 教養部創設事務所開設
	10月28日 教養部創設事務所にて第 72 回理事会を開催。昭和 42 年度より熊谷キャンパスに教養部開設を決定
昭和 41 (1966) 年	2月1日 有隣館竣工
	3月25日 短期大学部 A・B 館竣工
	4月20日 短期大学部商経科、熊谷キャンパスに移設
	6月15日 第Ⅱ期工事(教室棟・体育館・学寮)着工。第Ⅲ期工事(本部棟)着工。グラウンド開き
	9月25日 熊谷キャンパス、台風 26 号による大水害
昭和 42 (1967) 年	2月1日 熊谷総務課、学事課、厚生課、経理課、図書室設置
	3月25日 熊谷に教養部設置 大学事務室、教室棟、福利厚生棟、エネルギーセンター、体育館、新生学寮、白菊学寮竣工
	4月10日 第 1 回入寮式(新生学寮、白菊寮、民間委託寮)
	4月12日 熊谷キャンパス第 1 回入学式挙行
昭和 43 (1968) 年	4月 熊谷キャンパスに短期大学部社会科移転
	4月24日 本部棟竣工
	5月13日 建築工事竣工式挙行
昭和 44 (1969) 年	3月15日 保育専門学校設立認可を受ける
	3月25日 短期大学部全科移転
昭和 47 (1972) 年	4月1日 立正幼稚園開園 立正大学 100 周年
昭和 49 (1974) 年	1月23日 熊谷サークルボックス閉鎖
昭和 51 (1976) 年	7月24日 立正大学北埼玉地域研究センター設置
昭和 53 (1978) 年	4月 遺跡調査室設置、考古学陳列室開設
	9月21日 有隣館別館(洋室)完成
昭和 54 (1979) 年	3月1日 熊谷校内簡易郵便局開局
	7月31日 熊谷図書館竣工
	9月21日 熊谷図書館開館
昭和 55 (1980) 年	3月31日 教養部実験棟竣工、寄宿舍完成、弓道場移設完了
昭和 56 (1981) 年	3月5日 教養部研究棟竣工
	4月3日 日蓮宗宗立熊谷学寮落成式挙行 法学部設置
昭和 57 (1982) 年	4月 立正大学 110 周年
	9月11日 台風 18 号による熊谷校舎被害甚大
昭和 58 (1983) 年	2月16日 短期大学部教室棟落成
	3月31日 熊谷ゴルフ練習場完成

年		事 項
昭和 59 (1984) 年	10月26日	熊谷ゲストハウス(旧新生学寮)開館
	11月1日	学園合宿所を短期大学部D館に改修、第2食堂を短期大学部E館に改修
昭和 60 (1985) 年	3月13日	新福利厚生棟(ステラ)竣工
	3月31日	保育専門学校廃止認可
	10月	熊谷情報処理センター、健康管理センター開設
昭和 62 (1987) 年	9月10日	バスロータリー竣工
平成元 (1990) 年	3月28日	短期大学部教室棟(F館)落成式举行
平成 3 (1991) 年	2月28日	熊谷教育研究センター竣工に伴い、法学部研究室・法学部事務室が教育研究センター内へ移動
平成 4 (1992) 年	3月15日	インフォメーションセンター竣工
	4月	立正大学 120 周年 立正大学北埼玉地域研究センターを立正大学地域研究センターに改称
平成 5 (1993) 年	3月6日	短期大学部公開講座開設
	11月5日	野球部東都大学野球1部リーグへ昇格
平成 6 (1994) 年	4月	サークルボックス完成
平成 7 (1995) 年	3月31日	教養部廃止
	12月22日	社会福祉学部社会福祉学科、人間福祉学科設置認可
平成 8 (1996) 年	4月1日	社会福祉学部社会福祉学科、人間福祉学科設置 ユニデンスA・C館開館
	4月3日	食堂(パドマ)竣工
	1月16日	ユニデンスB館竣工
平成 9 (1997) 年	6月30日	社会福祉研究所設置
	12月19日	地球環境科学部環境システム学科、地理学科設置認可
	2月2日	地球環境科学部実験棟・研究棟竣工
平成 10 (1998) 年	4月1日	地球環境科学部環境システム学科、地理学科設置
	2月26日	短期大学部閉学
平成 11 (1999) 年	2月26日	短期大学部閉学
平成 13 (2001) 年	2月17日	法学部創立 20 周年記念式典
平成 14 (2002) 年	4月1日	立正大学 130 周年。立正大学博物館開館(初代館長:坂詰秀一)
平成 17 (2005) 年	3月	陸上競技場・ラグビー場・サッカー場を人工芝に改修
平成 19 (2007) 年	3月	野球場も人工芝へと改修
	5月16日	熊谷キャンパス再開発事業計画起工式举行
	7月25日	地鎮祭举行
	11月27日	倉庫・更衣室・クリーンセンター竣工
	12月25日	インフォメーションセンター・エネルギーセンター竣工
平成 20 (2008) 年	4月	(財)都市緑化機構より SEGES の認定を受ける
	11月29日	地球環境科学部創立 10 周年記念行事開催
平成 21 (2009) 年	3月2日	19号館(アカデミックキューブ・メディアフォレスト)、20号館(スポー ツキューブ)竣工
平成 22 (2010) 年	3月	ゲートプラザ他竣工
	6月30日	水景池・外航溝工事竣工
平成 23 (2011) 年	3月23日	7号館(子育て支援施設)・26号館(サッカー部寮)改修工事竣工
	4月1日	子育て支援センター「ベアリス」開設
	12月3日	法学部創立 30 周年記念行事開催
平成 24 (2012) 年	4月	立正大学 140 周年 社会福祉学部人間福祉学科を子ども教育福祉学科に改称

年	事項
---	----

平成 27 (2015) 年	5月7日	ユニデンスC館(ラグビー部・野球部寮)改修工事竣工
	1月10日	一般社団法人埼玉県障害者スポーツ協会設立10周年記念表彰にて社会福祉学部が『功労賞』を受賞
平成 29 (2017) 年	4月	公益財団法人 都市緑化機構の社会・環境貢献緑地評価システム SEGES の最高位 Superlative Stage を取得
	4月9日	熊谷キャンパス50周年記念 第10回立正大学ラグビーフェスティバル開催
	6月15日	硬式野球部、東都大学野球春季1部・2部入替戦にて1部復帰
	8月6・7日	熊谷キャンパス50周年記念立正大学サッカーフェスティバル開催
	10月14・15日	熊谷キャンパス開設50周年記念 U18女子セブンズラグビーフットボール大会開催



◀ 熊谷合宿寮 熊谷キャンパス初の建物



体育館 ▶

昭和42年3月、楨文彦氏設計による広場の一部として計画された



◀ 昭和43年竣工 橘寮

【参考文献一覧】

- 立正大学教養部 『Lotus』創刊号 昭和42年
新建築社 「立正大学熊谷新校舎計画」『新建築』第42号巻5号 昭和43年
大学史編纂委員会 『立正大学の120年』平成4年
立正大学教養部 『Lotus』第28号 平成6年
立正大学史編纂委員会 『立正大学史資料集』第1集 平成7年
江南町史編さん委員会 『江南町史』資料編2 古代・中世 平成10年
立正大学短期大学部短大史編纂委員会 『立正大学短期大学部50年史』平成11年
江南町史編さん委員会 『江南町史』通史編 下巻 平成16年
江南町史編さん委員会 『江南町史』通史編 上巻 平成16年
立正大学法学会 『立正大学法学部創立三十周年記念論集』平成24年
立正大学史編纂委員会 『立正大学の140年』平成24年



◀ 荒川大橋

大正14年に竣工したモダンな九連トラス橋。昭和55年に現在の形になるまで使用されていた。

現在、荒川大橋南詰交差点脇「荒川大橋トラス広場」にモニュメントとして残る。

情報メディアセンター、キャリアサポートセンター▶
昭和42年3月竣工。現在は取り壊されている。



1967



2017



【立正大学博物館：第12回特別展】

熊谷キャンパス 50周年記念

立正生の学び舎 - 熊谷キャンパスの半世紀 -

発行日：平成29年11月1日

編集・発行：立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL：048-536-6150 / FAX：048-536-6170

E-mail：museum@ris.ac.jp

URL：http://www.ris.ac.jp/museum/